

第4次

浜松市教育総合計画



令和7年度 実施報告書(案)

目次

第1章 評価・検証の概要

1	目的	1
2	評価・検証に係る調査	
	(1) 取組状況調査	1
	(2) 実態把握調査	1
3	令和7年度における調査	
	(1) 取組状況調査	2
	(2) 実態把握調査	2
	(3) 調査結果の分析方法	2

第2章 各政策・施策の評価・検証

1	第4次浜松市教育総合計画 体系図	3
2	各政策・施策の評価・検証	
	(政策1) 未来の創り手に求められる力の育成	4
	(政策2) 多様なニーズに対応した学びや支援の充実	29
	(政策3) 「はままつの先生」の魅力と資質能力の向上	43
	(政策4) 安全・安心に学べるより良い教育環境の整備	52
	(政策5) 多様な人材・主体との連携・協働	65

第3章 有識者の分析

1	理念・コンセプト・目指す姿を中心に 日本女子大学人間社会学部 教授 山下 絢 氏	75
2	不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒 の「困難さ」 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 副部長 卯月 由佳 氏	88
3	浜松市における児童生徒と教員の主観的 well-being 愛媛大学大学院教育学研究科 教授 露口 健司 氏	95

第4章 有識者の意見

1	静岡大学教育学部 准教授 島田 桂吾 氏	102
2	山梨大学教育学部 准教授 三井 一希 氏	103
3	静岡大学教育学部 准教授 塩田 真吾 氏	104
4	常葉大学大学院学校教育研究科 教授 紅林 伸幸 氏	105

参 考 第4次浜松市教育総合計画推進会議・推進部会

1	第4次浜松市教育総合計画推進会議	106
2	推進部会	107

第1章 評価・検証の概要

1 目的

- ・第4次浜松市教育総合計画の着実な推進に向けて、学校・教職員、児童生徒、保護者に調査を実施することで、成果指標の達成状況及び実態を把握し、各施策等の取組状況について評価・検証を行い、次年度以降の施策推進につなげる。
- ・調査結果について、大学や国と連携して分析することで、データの利活用の推進を図る。

2 評価・検証に係る調査

(1) 取組状況調査

ア 調査対象

- ・第4次浜松市教育総合計画 関係課

イ 調査方法

- ・毎年度実施

(2) 実態把握調査

ア 調査対象

《教職員》

- ・校長、教頭
- ・教員（主幹教諭・教諭（再任用職員含む）、
任期付教員（教諭）・臨時的任用職員（教諭）で授業を担当するもの

《児童生徒及びその保護者》

- ・小学5年生、中学2年生、高校2年生
- ・小学5年生、中学2年生、高校2年生の保護者

イ 調査方法

- ・毎年度実施（Google フォーム）

3 令和7年度における調査

(1) 取組状況調査

ア 調査時期 令和8年5月

イ 調査対象 関係課28課（詳細は以下の表のとおり）

部	課名
学校教育部	教育総務課、教育施設課、学校・地域連携課、教育支援課、教職員課、教育センター、指導課、市立高等学校、健康安全課
こども家庭部	こども若者政策課（青少年育成センター）、幼保運営課
市民部	市民生活課（くらしのセンター）、市民協働・地域政策課、中山間地域振興課、UD・男女共同参画課、創造都市・文化振興課、文化財課、博物館、美術館、中央図書館、スポーツ振興課
企画調整部	企画課、国際課
市長公室	広聴広報課
環境部	環境政策課
産業部	産業振興課、労働政策課
健康福祉部	福祉総務課（人権啓発センター）

(2) 実態把握調査

ア 調査時期 令和8年2月

イ 調査対象及び回答数 (対象・回答:人、回答率:%)

対 象 人数及 び割合	小学校			中学校			高等学校			合計		
	対象	回答	回答率	対象	回答	回答率	対象	回答	回答率	対象	回答	回答率
学校	96	96	100	48	48	100.0	1	1	100.0	145	145	100.0
教職員	2,354	1,909	81.1	1,500	1,237	82.5	77	60	78.0	3,931	3,206	81.6
児童 生徒	6,519	5,808	89.1	6,596	5,677	86.1	371	300	80.9	13,486	11,785	87.4
保護者	6,519	1,532	23.5	6,596	1,415	21.4	371	113	30.4	13,486	3,060	22.7

(3) 調査結果の分析方法

- ・ 実態把握調査における、教職員、児童生徒、保護者の実態について、取組の成果を計る。
- ・ 実態把握調査における、教職員、児童生徒、保護者の実態について、「理念・コンセプト」「多様性・包摂性」「教職員のウェルビーイング」の観点で分析を行う。

第2章 各政策・施策の評価・検証

1 第4次浜松市教育総合計画 体系図



2 各政策・施策の評価・検証

政策 1 未来の創り手に求められる力の育成

施策 1 確かな学力の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
全国学力・学習状況調査正答率の対全国比	全国平均以上の維持	(8月3日公表) (8月3日公表) (8月3日公表)
分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができていると回答した児童生徒の割合	小・中・高 85.0%	小 81.0% 中 77.3% 高 85.0%
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていると回答した児童生徒の割合	小・中・高 85.0%	小 78.1% 中 69.6% 高 75.7%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 …年度内算定不可

■取組 1 授業改善の推進

取組内容	評価	担当
新しい学習観に基づく家庭学習の在り方の啓発	A	教育センター
指定研究校等におけるICTを活用した授業改善に係る指導・助言及び取組の展開	A	教育センター
ICTの効果的な活用に向けての授業支援	A	市立高校
小中学校新学習指導要領の周知	A	教育センター
指定校による実践と課題分析	A	教育センター
高等学校新学習指導要領の周知	A	市立高校

■取組 2 幼児教育の質の向上

取組内容	評価	担当
本市幼児教育の指針「幼児期に育てたい力」教職員用指導資料の活用促進及び好事例の展開	A	幼保運営課
幼児教育・保育の充実に向けた学びの機会の保障	A	幼保運営課
幼稚園・認定こども園・小中学生を対象とした人権啓発資料作成及び配付	A	人権啓発センター
こどもたちが本物の美術作品や文化財を直接鑑賞できる機会の提供	B	美術館
学校等で実施する環境学習への支援	A	環境政策課
自立した消費者の育成に向けた消費生活に関する学習支援とエシカル消費の啓発	A	くらしのセンター

■取組3 きめ細かな指導体制の構築

取組内容	評価	担当
教科担任制の充実に資する加配教員の配置	A	教職員課
「小学校教科担任制ハンドブック（改訂版）」の作成	A	教育センター
はままつ式少人数学級編制の継続	A	教職員課
小学校への学習支援員、複式学級支援員、理科支援員の配置及び研修の実施	A	教職員課
	S	教育センター
大学入学者選抜等の情報収集及び展開	B	市立高校

■取組4 学力向上に資するPDCAサイクルの推進

取組内容	評価	担当
全国学力・学習状況調査、CBTに対応した市実施の学力調査の結果分析及び学校の状況に応じた指導助言の実施	B	教育センター

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位: % 差[比較]: Pt

★学 校

Pick Up! 確かな学力を育成するために、どのような取組をしましたか。

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた、指導力向上のための授業研究の実施	97.2			96.8			100			100		
2. 子供が、自分で目標や計画を立てて学習に取り組む機会の創出	69.4			67.4			75.0			100		
3. 学習の方法やペースを、子供自身が選んだり決めたりする機会の創出	64.6			70.5			54.2			100		
4. 子供や保護者に対する、家庭学習の啓発	54.2			58.9			45.8			0.0		
5. タブレット型端末の家庭への持ち帰りによる家庭学習の実施	65.3			71.6			54.2			100		
6. 各種調査結果の分析	50.7			47.4			58.3			100		
7. 貸出教材等の活用	13.2			18.9			2.1			0.0		
8. 外部人材の活用	66.0			75.8			47.9			100		
9. 「はままつの教育」の活用（校内研修での活用）	43.1			47.4			35.4			100		
10. 該当なし	0.0			0.0			0.0			0.0		

★教職員

Pick Up! 授業では、子供が自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っている。

対象	そう思う	どちらかといえば、 そう思う	どちらかといえば、 そう思わない	そう思わない
全体	26.6	49.1	22.2	2.1
小学校	26.1	50.7	21.7	1.5
中学校	27.8	46.9	22.6	2.7
高等学校	18.3	43.3	30.0	8.3

★児童生徒

成果指標 分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	79.3					
小学校	81.0					
中学校	77.3					
高等学校	85.0					

成果指標 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	73.9					
小学校	78.1					
中学校	69.6					
高等学校	75.7					

Pick Up! 授業では、自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っていると思いますか。

対象	そう思う	どちらかといえば、 そう思う	どちらかといえば、 そう思わない	そう思わない
全体	28.9	43.5	20.8	6.7
小学校	35.0	42.7	16.3	5.9
中学校	23.3	44.2	25.0	7.5
高等学校	19.7	44.7	28.3	7.3

★保護者

Pick Up! お子さんが自分で決めた時間に勉強に取り組めるよう、認め励ましていますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	22.2	57.4	14.2	2.6
小学校	24.4	58.2	13.9	2.9
中学校	19.4	57.5	14.9	2.5
高等学校	28.3	45.1	8.0	0.9



成 果

教員の指導力向上

情報端末を活用した家庭学習の促進



課 題

学校と家庭の連動性をさらに高めるための継続的な啓発

施策2 豊かな心の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
教育活動において、体系的継続的に体験活動を実施し、教育目標を達成していると認識している学校の割合	維持 (R6 95.2%)	小 97.9% 中 95.8%
人が困っているときは進んで助けしていると回答した児童生徒の割合	維持 (R6 91.6%)	小 91.8% 中 91.3% 高 89.3%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 人権教育の推進

取組内容	評価	担当
教職員の人権意識を高める人権教育担当の設置と研修の実施	S	教育センター
人権教育担当を中心とした人権教育諸計画の作成及び推進	A	市立高校
幼稚園・認定こども園・小中学生を対象とした人権啓発資料作成及び配付	A	人権啓発センター

■取組2 道徳教育の推進

取組内容	評価	担当
各校の実態把握、好事例の横展開による質の向上	A	教育センター
小中学校新学習指導要領の周知	A	教育センター
道徳教育の充実のための道徳教育推進教師の設置とマネジメントの支援	A	教育センター
道徳教育諸計画の作成	A	教育センター
道徳教育推進教師を中心とした道徳教育諸計画の作成及び好事例の展開	A	市立高校

■取組3 読書活動の充実

取組内容	評価	担当
「学習支援パック」等図書資料の活用に関する啓発及び情報提供	B	中央図書館
読書活動推進に関わる計画の策定及び支援	A	市立高校
学校図書館における環境整備に係る指導・助言及び支援	A	教育センター
学校図書館の管理・運営に関する図書館補助員への研修・連絡会の実施	A	中央図書館
読書活動の推進に向けた、学校図書館の環境整備	A	市立高校

■取組 4 文化芸術教育の充実

取組内容	評価	担当
美術館と連携した学習の推進	A	教育センター
こどもたちが本物の美術作品や文化財を直接鑑賞できる機会の提供	B	美術館
音響設備が整った地域施設を活用した表現の場の設定	A	教育センター
こどもたちが本物の音楽に触れる機会の提供	A	創造都市・文化振興課
音楽による開かれた学校づくりへの支援	A	創造都市・文化振興課

■取組 5 体験活動の充実

取組内容	評価	担当
体験活動の質的向上に向けた支援	A	教育センター
都市部の小学生と中山間地域住民との交流を含めた体験活動の実施	A	中山間地域振興課
職業探究や大学模擬授業による社会的自立に向けたプログラムへの支援	A	市立高校

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位: % 差[比較]: Pt

★学 校

Pick Up! 子供の豊かな心を育成するために、どのような取組をしましたか。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 道徳教育に関する指導力向上のための校内研修の実施	37.5			34.7			43.8			100		
2. 体験活動の充実	88.2			86.3			93.8			100		
3. 特別活動の充実	79.9			74.7			91.7			100		
4. 「はままつマナー」を活用した指導実践	29.2			35.8			16.7			0.0		
5. いじめ対策に関する校内体制の整備	95.8			94.7			100			100		
6. 生徒指導、人権課題に関する教員研修への参加促進	50.7			46.3			60.4			100		
7. 人権教育講座の開催	15.3			22.1			2.1%			0.0		
8. 読書活動推進に関する取組	60.4			68.4			45.8			100		
9. 文化・芸術に触れる機会の設定	65.3			71.6			54.2			100		
10. 該当なし	0.0			0.0%			0.0			0.0		

成果指標 教育活動において、体系的継続的に体験活動を実施し、教育目標を達成していますか。

【小中学校のみ回答】

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	96.5					
小学校	97.9					
中学校	95.8					
高等学校	-					

★児童生徒

成果指標 人が困っているときは、進んで助けていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	91.5					
小学校	91.8					
中学校	91.3					
高等学校	89.3					

成果指標 人は、それぞれ違っていいと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	98.1					
小学校	97.9					
中学校	98.1					
高等学校	99.3					

★保護者

Pick Up! 人が困っているときは、進んで助けるよう、お子さんに働きかけていますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	48.0	46.6	4.2	0.4
小学校	50.3	44.5	4.4	0.2
中学校	45.8	48.9	3.6	0.5
高等学校	45.1	45.1	8.0	1.8



成 果

思いやりの心の育成

学校における体制整備と体験活動の推進



課 題

読書活動および文化芸術教育の充実

人権教育の充実

施策3 健やかな心身の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
全国体力・運動能力、運動習慣調査における実技テストの値の対全国比	全国平均 並みの維持 R7 全国値 小男 53.03 小女 53.98 中男 42.06 中女 47.46	小男 52.40
		小女 53.05
		中男 42.13
		中女 48.99
中学に進んだら授業以外でも（中学・高校を卒業したら）自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと回答した児童生徒の割合	維持 R7 全国値 小男 87.0 小女 80.6 中男 90.9 中女 77.2 高 -	小男 86.9%
		小女 79.5%
		中男 88.0%
		中女 75.3%
		高 84.0%
学校や学校以外で身の周りに危険なことが起きた（地震や火事など）とき、どのように避難したり、身を守ったりしたらよいか知っている回答した児童生徒の割合	小・中・高 95.0%	小 95.4%
		中 92.0%
		高 89.7%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 学校保健・食育の充実

取組内容	評価	担当
がん教育の推進	A	健康安全課
食に関する指導に資する教材の活用	A	健康安全課

■取組2 運動習慣の確立

取組内容	評価	担当
教員向け指導資料作成と周知	A	教育センター
体育科・保健体育科における体力の向上及び運動習慣の確立を踏まえた授業改善の推進	A	教育センター
分析結果の学校への周知及び学校の実情に応じた指導助言の実施	A	教育センター

■取組3 生活習慣の確立

取組内容	評価	担当
朝食摂取指導の促進	A	健康安全課
健康に関する理解の促進	A	健康安全課

■取組 4 安全教育の充実

取組内容	評価	担当
学校における生活安全教育の推進	A	健康安全課
	A	市立高校
交通安全教育の推進	A	健康安全課
	A	市立高校
実践的な防災教育の推進	A	健康安全課
	A	市立高校
発達段階に応じた「防災教育ポータルサイト」（旧：浜松市版防災ノート）の活用促進	B	健康安全課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位: % 差[比較]: Pt

★学 校

Pick Up! 子供の健やかな体の育成のために、どのような取組をしましたか。（複数回答可）

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 学校保健に関する校内研修の実施	59.0			55.8			66.7			100		
2. がん教育の実施	24.3			20.0			33.3			0.0		
3. 保護者・子供に対する朝食摂取率向上のための啓発	62.5			58.9			70.8			100		
4. 「食物アレルギー対応マニュアルに基づく校内研修の実施	78.5			77.9			81.3			100		
5. 健全な食習慣を育む食育の実施	75.7			74.7			79.2			100		
6. 児童生徒の体力・運動能力の向上のための取組の実施（授業、部活動以外）	52.1			68.4			20.8			0.0		
7. 該当なし	0.7			0.0			2.1			0.0		

★教職員

Pick Up! 運動することの必要性を子供に指導している（体育科、保健体育科、学級活動、運動部活動以外の場面）。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	44.2	42.5	11.0	2.2
小学校	49.3	42.6	6.7	1.4
中学校	37.5	42.3	17.0	3.2
高等学校	23.3	45.0	23.3	8.3

★児童生徒

成果指標 小学校（中学校・高校）を卒業したら授業以外でも自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	83.3					
小学校	84.4					
中学校	82.2					
高等学校	84.0					

成果指標 学校や学校以外で身の回りに危険なことが起こった時、どのように避難したり、身を守ったりしたらよいか知っていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	93.6					
小学校	95.4					
中学校	92.0					
高等学校	89.7					

★保護者

Pick Up! お子さんに、食事のときは、マナーを守り、自分に合った量を栄養のバランスよく食べるよう促していますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	41.9	49.1	7.5	0.7
小学校	42.8	48.2	8.0	0.6
中学校	40.5	50.0	7.6	0.8
高等学校	47.8	50.4	0.9	0.9



成 果

安全教育と防災意識の向上

運動習慣の確立と体力向上

食育と健康管理の推進



課 題

防災教育ポータルサイトのさらなる活用

体力向上に向けた日常的な取組

学校保健に関する校内体制の充実

施策4 グローバル人材の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
CEFR*の A1 レベル相当以上の生徒の割合	60.0%	54.0%
言葉や文化が異なる人や大人を含む年齢が異なる人との交流は楽しみであると回答した児童生徒の割合	小・中・高 85.0%	小 75.0%
		中 70.5%
		高 71.4%
今住んでいる地域（市町村）が好きと回答した児童生徒の割合	維持 (R6 93.8%)	小 94.1%
		中 92.7%
		高 94.0%

*：語学力（英語など）がどれくらいあるかを国際的な基準で測るための「ものさし」

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 外国語教育の充実

取組内容	評価	担当
ALT の適正配置と資質能力の向上に向けた研修の実施	A	教育センター
ICT を活用した授業改善の推進	A	教育センター
言語活動の充実に向けた学校支援	A	教育センター
MEXCBT*を活用したこどもの英語力向上と活用事例に基づく授業改善アイデアの周知	A	教育センター

*：文部科学省のオンラインの学習・CBT システム

■取組2 郷土愛の醸成

取組内容	評価	担当
「夢育やらまいか事業」の実施	A	学校・地域連携課
「幼稚園特色化推進事業」における地域人材及び地域資源の活用促進	A	幼保運営課
地域教育資源を活用したカリキュラム・マネジメントの充実に向けた支援	A	教育センター
「浜松学」のあり方検討	A	企画課
「浜松学」に対応したカリキュラムの洗い出しと実施支援	A	教育センター
市内企業や浜松市の魅力を伝える特別授業の実施	A	労働政策課
	A	教育総務課
「浜市ふるさと講座」の実施	A	市立高校
次世代への無形民俗文化財継承のための支援	S	文化財課
実際に見たり触ったりできる博物館資料の提供	A	博物館

★学校

Pick Up! 「郷土愛の醸成」を図るために、どのような取組をしていますか。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 地域住民と連携した体験活動 (例 農業体験)	80.6			85.3			72.9			0.0		
2. 地元企業や大学等と連携した体験活動 (例 ものづくり、プログラミング 教育)	37.5			38.9			35.4			100		
3. 地域の伝統芸能・伝統行事の体験や継承活動 (例 神楽、おくない、田楽)	25.0			26.3			22.9			0.0		
4. 浜松市への理解や関心を高める講座の実施 (例 はままつ人づくりネットワーク等の出前講座)	50.7			55.8			41.7			100		
5. 地域に貢献する活動(例 奉仕作業、クリーン作戦)	42.4			32.6			62.5			100		
6. 該当なし	2.1			3.2			0.0			0.0		

★教職員

Pick Up! 子供が地域の魅力を発見する、または、地域の将来を考える機会を設けている。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	39.0	47.8	11.8	1.5
小学校	40.0	46.8	11.6	1.6
中学校	37.9	48.7	12.1	1.4
高等学校	28.3	58.3	11.7	1.7

★児童生徒

成果指標 自分が住んでいるまち(地域)は好きですか。

対象	R7	R8	R9	R10	R11	差⇔R7
全体	93.4					
小学校	94.1					
中学校	92.7					
高等学校	94.0					

成果指標 言葉や文化が異なる人や大人を含む年齢が異なる人との交流は楽しみですか。

対象	R7	R8	R9	R10	R11	差⇔R7
全体	72.7					
小学校	75.0					
中学校	70.5					
高等学校	71.4					



成 果

地域社会と連携した郷土愛の醸成

外国語教育の充実



課 題

多様な交流機会の充実に向けて

地域資源の活用と主体的な機会設定

施策5 情報活用能力の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
情報活用能力調査の値	55.0%	小 55.2% 中 41.2%
前学年までに受けた授業で、PC タブレットなどの ICT 機器の利用が週3回以上と回答した児童生徒の割合	小・中・高 80.0%	小 81.1% 中 82.6% 高 97.4%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 情報教育の充実

取組内容	評価	担当
「学校教育の情報化計画」の策定	C	教育総務課
	B	教育センター
学校教育の情報化に関する取組について PDCA サイクルの構築	A	教育センター
教育の情報化推進リーダーの設置と質的向上	A	教育センター
ICT 活用に向けた支援	A	市立高校

■取組2 情報モラル教育の充実

取組内容	評価	担当
インターネット（SNS・ゲーム等）利用に伴うトラブル等の実態把握及び予防啓発	A	青少年育成センター
情報モラル指導教材の導入検討及び指導への支援	A	教育センター
市立高校情報モラル指導教材の作成及び周知	A	市立高校

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：％ 差[比較]:Pt

★学 校

Pick Up! 情報社会を生きる能力を育成するために、どのような取組をしましたか。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 教員の ICT 活用指導力向上をねらいとした校内研修の実施	94.4			46.8			91.7			100		
2. プログラミング教育の実施	30.6			32.6			27.1			100		
3. 情報モラル教育の実施	95.1			95.8			95.8			100		
4. 該当なし	0.0			0.0			0.0			0.0		

★児童生徒

成果指標 (小) 5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。(週3以上と回答した児童の割合)

(中・高) 1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。(週3以上と回答した生徒の割合)

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	82.3					
小学校	81.1					
中学校	82.6					
高等学校	97.4					

Pick Up! ICT機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができていると思いますか。

対象	そう思う	どちらかといえば、 そう思う	どちらかといえば、 そう思わない	そう思わない
全体	49.8	39.3	8.2	2.6
小学校	53.6	36.2	7.6	2.6
中学校	46.5	42.0	8.7	2.8
高等学校	40.7	48.0	10.3	1.0

★保護者

Pick Up! 情報モラル（情報社会で適正な活動を行うための基となる考え方と態度）について、お子さんと話をすることがありますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	35.8	50.2	10.7	2.0
小学校	35.4	50.4	11.1	2.0
中学校	36.2	50.3	9.9	1.9
高等学校	35.4	46.0	14.2	3.5



成 果

ICT の日常的な活用と協働的な学びの推進

情報モラル教育



課 題

情報化計画の策定

プログラミング教育の実施

家庭における情報モラルの啓発

施策6 持続可能な社会・地域の形成に参画する態度の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
地域や社会の出来事や課題について、こどもが探究的に学ぶことができるよう学習計画を立て、成果を認識している学校の割合	維持 (R6 93.1%)	小 89.5%
		中 91.6%
		高 100%
地域や社会をより良くするために何かしてみたいと思う児童生徒の割合	小・中・高 85.0%	小 78.6%
		中 75.7%
		高 80.4%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 特別活動・キャリア教育・主権者教育の充実

取組内容	評価	担当
特別活動を要としたキャリア教育の充実に向けたキャリア教育推進教師の設置と指導・助言及び支援	A	教育センター
	A	市立高校
こどもの社会参画意識向上に資する学習や活動の在り方に関する指導・助言及び情報提供	A	教育センター
三遠南信中学生交流会の成果の市内展開	A	教育センター
若者の意見を市政運営の参考とする「中学生広聴集会」の実施	A	広聴広報課
市民主役のまちづくり意識を育てる講座の提供	A	市民協働・地域政策課
「浜松市への政策提言」活動の実施	S	市立高校

■取組2 持続可能な開発目標(SDGs)やSTEAM等に関する教育の充実

取組内容	評価	担当
学校における探究的な学びや教科等横断的な学習への支援	A	教育センター
教科横断的な学びを充実させた探究的な学びや STEAM 教育の研究及び実施への支援	A	市立高校
ユニバーサルデザインの周知・啓発のためのデジタル教材の提供及びUD学習支援	A	UD・男女共同参画課
男女共同参画意識向上のための学習会への支援	A	UD・男女共同参画課
学校等で実施する環境学習への支援	A	環境政策課
自立した消費者の育成に向けた消費生活に関する学習支援とエシカル消費の啓発	A	くらしのセンター

★学校

成果指標 地域や社会の出来事や課題について、学習計画を立てることで子供が探究的に学ぶことができるようになったと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	89. 6					
小学校	89. 5					
中学校	91. 6					
高等学校	100					

★教職員

Pick Up ! (小) 学級生活をよりよくするために、学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるような指導を行っている。
(中・高) 学級生活をよりよくするために、学級活動で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法等を合意形成できるような指導を行っている。

対象	よくしている	どちらかといえば、 している	あまりしていない	全くしていない
全体	33. 2	55. 0	10. 2	1. 5
小学校	32. 8	55. 0	10. 8	1. 4
中学校	34. 4	54. 8	9. 2	1. 6
高等学校	21. 7	60. 0	15. 0	3. 3

★児童生徒

成果指標 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	77. 3					
小学校	78. 6					
中学校	75. 7					
高等学校	80. 4					

Pick Up ! 学級をより良くするために何かしてみたいと思いますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	36. 2	43. 3	15. 2	5. 3
小学校	40. 9	41. 3	13. 2	4. 5
中学校	32. 1	45. 0	16. 8	6. 0
高等学校	23. 0	48. 3	22. 0	6. 7

Pick Up ! 学校をより良くするために何かしてみたいと思いますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	30. 1	47. 2	16. 7	6. 0
小学校	41. 6	40. 8	13. 2	4. 4
中学校	29. 2	45. 3	18. 8	6. 6
高等学校	24. 7	46. 3	22. 3	6. 7

★保護者

Pick Up !

地域や社会をよりよくすることについて、お子さんと話をすることがありますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	12.7	43.5	35.4	6.6
小学校	12.5	44.4	35.8	6.2
中学校	12.5	43.0	35.2	7.0
高等学校	18.6	38.9	32.7	8.0



成 果

若者の社会参画意識の向上



課 題

高等学校生徒・保護者の更なる意識の向上

合意形成の力を高める指導力の向上

施策7 育ちや学びをつなぐ教育の推進

成果指標

	目標値	R7 年度
幼稚園等と小学校間で、互いに連携し子供の育ちの円滑な接続を図っていると回答した園・学校の割合	幼・小 100%	幼 82.0%
		小 93.7%
前年度までに、近隣の中学校（小学校）と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組をどの程度行ったかに対する肯定的な回答	小・中 100%	小 60.0%
		中 52.1%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 幼保小連携の推進

取組内容	評価	担当
合同研修や連絡会等への参加啓発	A	幼保運営課
	A	教育センター
交流会の計画作成及び実施後評価についての啓発	A	幼保運営課
	A	教育センター
「つながる」カリキュラム参考資料の普及啓発及び活用促進	A	幼保運営課
	A	教育センター
「スタートカリキュラム」に係る取組についての情報発信	A	教育センター

■取組2 小中連携の充実

取組内容	評価	担当
小中連携に係る情報収集及び好事例の横展開	A	教育総務課
中学校区小中合同研修会への支援	A	教育総務課

■取組3 ポートフォリオの効果的活用

取組内容	評価	担当
好事例の横展開	A	教育センター

★学 校

成果指標

幼稚園等と小学校間で、互いに連携し子供の育ちの円滑な接続を図っていますか。

(複数回答可)【小学校のみ回答】

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 幼保小の連携窓口がある				84.2								
2. 相互の教育の内容や方法に関して、園・校の教職員が話し合う合同会議がある				54.7								
3. 園・校の合同会議で話し合う内容が深まっている (接続する園・校の実践について、相互に実感を伴った理解のもと話し合いがなされている)				23.2								
4. 合同会議の定期開催が継続し、短期的・長期的な視点から話し合いをしている (改善・発展のため、接続する園・校での子供の学びや生活を具体的にイメージしながら話し合っている)				22.1								
5. 該当なし				6.3								

★児童生徒

Pick Up!

授業では、自分で学ぶ内容を決め、計画を立てて学ぶ活動を行っていると思いますか。

対象	思う	どちらかといえば、思う	どちらかといえば、思わない	思わない
全体	28.9	43.5	20.8	6.7
小学校	35.0	42.7	16.3	5.9
中学校	23.3	44.2	25.0	7.5
高等学校	19.7	44.7	28.3	7.3



成 果

幼稚園と小学校の円滑な接続

研修や学校訪問を通じた円滑な接続の推進

児童生徒の主体的に学ぶ姿勢の育成



課 題

幼保小の連携に向けた場作り

合同会議における話し合い内容の充実

近隣校との教育課程における共通の取り組みの推進

中高段階における主体的な学びの支援

政策 2

多様なニーズに対応した学びや支援の充実

施策 1 多様なニーズに対応したこども・保護者への支援

成果指標

	目標値	R7 年度
スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)の活動時間が学校のニーズにどれだけ対応できているか学校の満足度(100%と回答した学校の割合)	SC	小 31.6%
	小・中・高	中 45.8%
	100%	高 100%
	SSW	小 30.5%
	小・中 100%	中 37.5%
家庭や学校以外で、悩みや困りごとなどを相談できる場所があることを知っている児童の割合	小 80.0%	小 72.6%
こども・若者を対象とした育成支援機関を知っている生徒の割合	中・高	中 67.6%
	80.0%	高 68.4%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組 1 多様な専門家との教育相談体制の充実と社会的自立に向けての支援

取組内容	評価	担当
スクールカウンセラー(SC)の配置拡充	S	教育支援課
スクールソーシャルワーカー(SSW)の配置拡充	A	指導課
スクールカウンセラー(SC)の資質能力の向上	A	教育支援課
スクールソーシャルワーカー(SSW)の資質能力の向上	A	指導課
教育委員会窓口への人員配置	A	教育支援課
学習上、学校生活上等に困難を抱えるこどもの相談窓口の周知	A	教育支援課
学習上、学校生活上等に困難を抱えるこどもに対する学校と連携した相談支援体制の構築	A	教育支援課
一人一台端末を活用した「心の健康観察」の活用促進	B	教育支援課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：％ 差[比較]:Pt

★学 校

成果指標 スクールカウンセラー(SC)の活動時間は、学校のニーズに対応できていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	36.1					
小学校	31.6					
中学校	45.8					
高等学校	100					

成果指標

スクールソーシャルワーカー（SSW）の活動時間は、学校のニーズに対応できていますか。

【小中学校のみ回答】

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	32.6					
小学校	30.5					
中学校	37.5					
高等学校	-					

★教職員
Pick Up!

個々の児童生徒の状況に応じて、多様で柔軟な指導・支援を行っている。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	56.5	41.9	1.6	0.1
小学校	60.0	38.6	1.3	0.1
中学校	52.0	46.1	1.9	0.1
高等学校	36.7	58.3	5.0	0.0

★児童生徒
成果指標

（小）家庭や学校以外で、悩みや困りごとなどを相談できる場所があることを知っていますか。

（中・高）こども・若者を対象とした育成支援機関（青少年の家、児童相談所、児童家庭支援センター、教育相談支援センター、ハローワーク、地域若者サポートステーションなど）を知っていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	70.2					
小学校	72.6					
中学校	67.6					
高等学校	68.4					



成 果

専門家配置の拡充と相談体制の構築

多様なニーズに応じた指導と支援



課 題

学校のニーズに応じた専門家配置

相談窓口の認知度向上

施策2 特別な支援を必要とするこどもの学びや支援の充実

成果指標

	目標値	R7 年度
困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できると回答した児童生徒の割合 (個別の支援計画作成児童生徒)	小・中 80.0%	小 69.3% ※参考値
		中 62.0% ※参考値
発達支援学級を経験した職員の割合	小・中 80.0%	小 64.2%
		中 82.6%

※参考値：対象児童生徒のうち有効回答が2割程度であるため、参考値として示しています。

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 …年度内算定不可

■取組1 教育的ニーズに配慮した学習環境の提供

取組内容	評価	担当
中学校区を単位とした整備の推進	A	教育支援課
マルチメディアデジ教科書の提供	A	教育支援課
発達支援教室支援員、スクールヘルパーの配置と質的向上	A	教職員課
	S	教育センター
幼児ことばの教室担当者の配置と研修の実施	A	教育支援課
通級による指導のサテライト教室の拡充	A	教育支援課
発達支援学級のモデル教室事業の実施と事例の展開	A	教育支援課

■取組2 インクルーシブ教育システムの実現に向けた整備

取組内容	評価	担当
巡回指導・巡回相談の実施	A	教育支援課
看護師の配置	A	教育支援課
校内研修等への参画	A	教育支援課
発達支援教育コーディネーターの設置と校内支援体制の整備に向けた研修の実施	A	幼保運営課
	A	教育支援課
	A	市立高校

■取組3 特別な支援を必要とするこども等への相談支援体制の充実

取組内容	評価	担当
就学先ガイダンスの実施	A	教育支援課
こどもの進路に関するリーフレットの作成及び教職員向けの手引きの随時更新	A	教育支援課
外部専門家と連携した教育相談実施に向けた支援	A	市立高校
就学に向けた専門調査員の任命とその質的向上	A	教育支援課
園・学校への専門調査及び就学教育相談の実施	A	教育支援課

★学 校

Pick Up! 子供一人一人の可能性を引き出し伸ばすために、どのような取組をしましたか。
(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 職員会議や学年会等での、教職員間における子供のよい表れについての情報共有	80.6			82.1			79.2			100		
2. 子供同士が互いの良さを認め合う場の設定	91.0			94.7			85.4			0.0		
3. SCやSSWと連携した教育相談の実施	91.0			91.6			91.7			100		
4. 児童生徒への端末を利用した教育相談の実施	62.5			51.6			85.4			100		
5. 不登校児童生徒のための学びの場の提供	8.3			8.4			8.3			0.0		
6. 不登校支援として国が示す「児童生徒理解支援シート」の活用	88.9			87.4			93.8			100		
7. 個別の支援が必要な児童生徒のための校内体制や環境の整備	61.1			60.0			64.6			0.0		
8. 外国人児童生徒の個々の日本語能力に応じた支援の工夫	0.7			0.0			2.1			0.0		
9. 該当なし	5.6			4.2			8.3			100		

★教職員

成果指標 これまでに発達支援学級の担任または授業を担当したことがありますか。
【小中学校のみ回答】

対象	発達支援学級（特別支援学校を含む）の学級担任の経験がある。	発達支援学級（特別支援学校を含む）の学級担任の経験はないが、年間を通して授業を受け持った経験がある。	発達支援学級（特別支援学校を含む）の学級担任の経験もないし、年間を通して授業を受け持った経験もない
全体	25.8	42.8	28.9
小学校	28.9	35.3	38.6
中学校	23.6	59.0	16.7
高等学校	-	-	-

★児童生徒

Pick Up! 困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。
【小中学生のみ回答】（通常学級児童生徒）

対象	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
全体	33.4	33.5	17.3	11.5
小学校	34.1	33.1	18.9	13.9
中学校	32.6	33.9	15.7	9.1
高等学校	-	-	-	-

★保護者

Pick Up ! 学校や子供に関することを、教職員に気軽に相談できますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	24.3	49.6	19.2	5.7
小学校	28.1	51.2	15.3	4.4
中学校	21.6	48.8	21.8	6.4
高等学校	7.1	38.1	39.8	14.2



成 果

個別の教育的ニーズに応じた学習環境の整備

支援体制の構築と専門性の向上



課 題

教職員の指導力の育成

↑
↓

児童生徒が安心して相談できる環境の整備

校内体制の整備と保護者との連携強化

施策3 不登校児童生徒の学びや支援の充実

成果指標

	目標値	R7 年度
困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できると回答した児童生徒の割合（不登校児童生徒）	小・中 80.0%	小 61.8% ※参考値 中 47.8% ※参考値
学校内外の機関から相談・指導等を受けている不登校児童生徒の割合	100%	76.6%

※参考値：対象児童生徒のうち有効回答が2割程度であるため、参考値として示しています。

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 不登校児童生徒に対する多様な教育機会の確保

取組内容	評価	担当
校内まなびの教室の設置	A	指導課
校内まなびの教室支援員の配置と質的向上 （校内まなびの教室支援員対象のオンライン研修の実施）	A -	指導課 教育センター
校外まなびの教室の増設	A	指導課
学びの多様化学校の設置に向けた検討	A	教育総務課
不登校デジタル支援 HP の運営	A	指導課
小学生を対象とした基礎学力支援のための「まなブース」の充実	A	指導課
ICT等を活用した不登校生徒への学習支援	A	指導課
	A	市立高校
民間施設（フリースクール等）との連携促進	A	指導課
こどもの学力保障に向けた静岡県バーチャルスクールへの連携	A	指導課

■取組2 不登校児童生徒等への相談支援体制の充実

取組内容	評価	担当
不登校対応コーディネーターの設置	C	指導課
多様なチャンネルによる情報提供や個別相談の実施	A	教育支援課
保護者対象の対面情報交換会の実施	A	教育支援課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：％ 差[比較]:Pt

★児童生徒

成果指標

困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。

【小中学生のみ回答】（不登校児童生徒）

対象	R7	R8	R9	R10	R11	差⇔R7
全体	53.1					
小学校	61.8					
中学校	47.8					
高等学校	-					



成 果

校内外における居場所の拡充

相談体制の多角化と保護者への情報提供



課 題

不登校児童生徒の相談支援体制の拡充

児童生徒の安心感の醸成と効率的な学校支援体制の再構築

施策4 外国につながるこどもの学びや支援の充実

成果指標

	目標値	R7 年度
困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できると回答した児童生徒の割合（外国人児童生徒）	小・中 80.0%	小 75.0% 中 65.3%
日本語指導が必要な児童生徒等の「特別の教育課程」の実施を希望する学校における実施率	100%	100%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 日本語指導が必要な外国人児童生徒等への指導体制の充実

取組内容	評価	担当
就学支援員や就学サポーター等、こどもの実態に応じた適正な配置	A	教育支援課
就学支援員やバイリンガル支援員等の質的向上	A	教育支援課
外国人児童生徒指導リーダーの育成による教員の専門性の向上	A	教育支援課
特別の教育課程編成と実施に向けた外国人児童生徒教科指導員の配置および指導助言	A	教育支援課
初期日本語指導拠点校の増設	B	教育支援課
進学希望外国人生徒のための放課後勉強室の開設	A	教育支援課
ICTを活用した外国人児童生徒に対する学習活動等の支援	A	教育支援課

■取組2 母語・母文化の重要性や個別多様な教育的ニーズに配慮した支援の充実

取組内容	評価	担当
多様な言語に対応した支援員の配置と機動的な就学後指導の実施	B	教育支援課
3言語による母国語教室の開催支援	A	教育支援課
HICE（浜松国際交流協会）NP0と連携した身近なロールモデルの学校への派遣	A	教育支援課

■取組3 外国人児童生徒等への相談支援体制の充実

取組内容	評価	担当
多言語による就学相談の実施	A	教育支援課
手続等保護者に対する就学ガイダンスの実施	A	教育支援課
学校と保護者の面談等へのリモート支援の実施	S	教育支援課
入学予定者及び保護者に対するプレスクールの実施	A	教育支援課
進路について語る会の実施	A	教育支援課

★児童生徒

成果指標

困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。

【小中学生のみ回答】(外国人児童生徒)

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	70.2					
小学校	75.0					
中学校	65.3					
高等学校	-					



成 果

指導体制の充実

多様な学習機会の提供



課 題

初期日本語指導拠点校の開設

児童生徒が安心して相談できる環境整備

施策5 多様な才能・個性を伸ばす機会の提供

成果指標

	目標値	R7 年度
自分が学びたいことやできるようになりたいことに挑戦する機会・場所があると回答した児童生徒の割合	100%	小 89.0%
	100%	中 90.1%
	100%	高 90.4%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 相談体制の構築と多様な学習機会等の提供

取組内容	評価	担当
教育委員会窓口への人員配置	A	教育支援課
学習上、学校生活上等に困難を抱えるこどもの相談窓口の周知	A	教育支援課
学習上、学校生活上等に困難を抱えるこどもに対する学校と連携した相談支援体制の構築	A	教育支援課
プロスポーツチーム等と連携した多様なスポーツを体験する機会の拡大	A	スポーツ振興課
理数・ものづくり・ICT 分野における子供の才能や学習の進度に合わせた講座の提供	A	創造都市・文化振興課
次世代起業家の育成	A	産業振興課
NP0 等と連携した理科・ものづくりに関する講座の実施状況把握、好事例の収集と展開	S	教育センター
大学等と連携した高校生への高度な学問の一端に触れ、活動を行う機会の提供	A	市立高校
学校における部活動指導員の配置及び資質能力の向上	A	指導課
	A	市立高校

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：% 差[比較]:Pt

★教職員

Pick Up! 子供が学びたいことやできるようになりたいことに挑戦する機会・場所を設定したり、学校外の機会や場所を案内したりしている。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	29.8	50.6	16.6	3.0
小学校	30.5	50.6	15.9	3.1
中学校	28.9	50.7	17.6	2.8
高等学校	26.7	48.3	20.0	5.0

Pick Up! 子供が難しいことにも失敗を恐れず挑戦できるよう支援している。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	50.7	47.4	1.7	0.2
小学校	53.2	45.3	1.3	0.2
中学校	47.8	49.7	2.3	0.2
高等学校	31.7	63.3	5.0	0.0

★児童生徒

成果指標 自分が学びたいことやできるようになりたいことに挑戦する機会・場所がありますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	89.6					
小学校	89.0					
中学校	90.1					
高等学校	90.4					

Pick Up! 難しいことにも失敗を恐れずに挑戦していますか。

対象	している	どちらかといえ ば、している	どちらかといえ ば、していない	していない
全体	32.0	43.6	19.6	4.8
小学校	36.2	43.1	16.4	4.2
中学校	28.1	43.9	22.4	5.6
高等学校	26.7	44.3	28.3	0.7

★保護者

Pick Up! お子さんが学びたいことやできるようになりたいことに挑戦できるよう、お子さんを認め励ましていますか。

対象	当てはまる	どちらかといえ ば、当てはまる	どちらかといえ ば、当てはまらない	当てはまらない
全体	43.3	52.8	2.5	0.4
小学校	43.7	52.7	2.4	0.3
中学校	43.0	52.7	2.5	0.4
高等学校	41.6	54.0	3.5	0.9



成 果

専門的な体験学習と学習意欲の向上

挑戦を後押しする環境の広がり



課 題

失敗を恐れず挑戦する意識の向上

学校内外の機会を繋ぐ教職員のサポート強化

政策 3

「はままつの先生」の魅力と資質能力の向上

施策 1 志ある優れた教職員の確保

成果指標

	目標値	R7 年度
採用選考試験受験者採用倍率	維持 R6 幼 1.7 倍 小 2.3 倍 中 6.1 倍	幼 2.4 倍
		小 2.2 倍
		中 5.6 倍
病気休職者割合	全国平均を下回る 全国 0.77% (R6)	1.09%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組 1 これからの学校教育を担う質の高い人材の確保

取組内容	評価	担当
民間企業の力も活用した、教員を志す学生（高校生含む）への浜松市の教育や教職の魅力の PR	A	教職員課
幼稚園教諭・保育士として幼児教育・保育に携わることの魅力についての PR の実施	A	幼保運営課
ペーパーティーチャーへの情報発信	A	教職員課
浜松市が目指す教職員像の周知と学生の状況に関する意見交換の実施	A	教職員課
	A	幼保運営課
幼稚園教諭を目指す学生への保育体験の機会提供及び人材の確保	A	幼保運営課

■取組 2 本市の教育的ニーズに応じた教員採用のあり方検討

取組内容	評価	担当
志願者確保に効果的な試験方法の在り方検討と改善	A	教職員課
多様性を持った優れた人材確保の検討	A	教職員課

■取組 3 教職員支援体制の構築

取組内容	評価	担当
学校における労働安全衛生管理体制の整備	A	教職員課
	A	市立高校
若手教職員のサポート体制の構築	A	教職員課
教職員相談窓口の拡充	A	教職員課
「勤務間インターバル」を確保するための取組推進	C	教職員課
中学校生徒指導担当教師の全校配置	A	教職員課
様々なキャリア段階の教職員のバランスよい配置	A	教職員課



成 果

多様な人材確保

教職員のサポート体制



課 題

働き方改革の推進

生徒指導担当教員の全校配置に向けた継続的な人員確保

施策2 専門性を有する質の高い教職員の育成

成果指標

	目標値	R7 年度
自律的、継続的に学び続ける教職員の割合	100.0%	幼 99.3%
		小中 98.7%
		高 93.4%
「教員育成指標」のキャリア段階における、求められる資質能力の達成度	80.0%	幼 84.2%
		小中 86.9%
		高 100%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 「教員育成指標」の効果的な運用

取組内容	評価	担当
「教員育成指標」の改訂に向けた検討及び周知	A	教職員課
	S	教育センター
学びのサイクル実現に向けた全国教員研修プラットフォーム「Plant」の活用	S	教育センター
	A	市立高校
管理職に対する、教職員への受講奨励や振り返りの適切な運用に向けた指導助言の実施	A	教職員課
	S	教育センター
	A	幼保運営課

■取組2 「教員育成指標」に基づく研修の充実

取組内容	評価	担当
計画に基づいた適切な研修の実施	A	教職員課
	S	教育センター
静岡県等との連携による適切な研修の実施	A	市立高校

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：％ 差[比較]:Pt

★学 校

Pick Up! 教職員の資質能力向上のために、どのような取組をしていますか（複数回答可）

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 校内研修の実施	97.2			97.9			97.9			100		
2. 学校全体でのOJTの実施	54.9			55.8			54.2			100		
3. 「浜松市教員育成指標」に示されたキャリア段階に応じて求められる資質能力の教職員への周知	64.6			64.2			66.7			100		
4. 希望研修や自主研修への参加促進	86.8			86.3			89.6			100		
5. 各種研修参加者による、校内での研修内容の共有	55.6			60.0			47.9			0.0		
6. 該当なし	0.0			0.0			0.0			0.0		

★保護者

Pick Up!

あなたが学校・教師を信頼できるかどうかを判断する視点として、当てはまるものを全てを選択してください。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 子どもが生き生きとして学校に通っている	67.6			71.1			63.5			70.0		
2. 現在の学年になってから、学力向上の傾向が出てきた	18.6			18.2			19.0			17.3		
3. 教師が、わが子のことをよく理解している	58.1			59.1			59.1			33.6		
4. 教師集団に、やる気とチームワークを感じる	22.5			22.1			23.4			16.4		
5. 学校体制で安全対策を十分に行っている	33.9			36.3			31.2			36.4		
6. 学校体制でいじめ対策を十分に行っている	33.8			36.6			31.3			27.3		
7. 学校としてのビジョンが保護者に見える	12.9			12.4			12.9			20.0		
8. 学校が保護者や地域に開かれている	17.3			18.6			16.1			13.6		
9. 相談や質問に対する学校の回答が丁寧である	40.0			41.7			39.2			28.2		
10. 学校内のどこ（だれ）に相談したらよいか明確である	19.8			18.7			21.4			14.5		
11. 学校が保護者の要望やニーズにこたえてくれている	15.0			15.1			14.7			17.3		
12. 学校行事の内容が工夫されている	21.3			20.9			22.0			17.3		
13. 部活動や課外活動が充実している	14.7			5.9			22.9			32.7		
14. その他	2.7			2.1			3.4			1.8		



成 果

自律的な学びの促進

研修の充実



課 題

校内での実践的共有の推進

施策3 多様な支援スタッフの配置

成果指標

	目標値	R7 年度
様々な支援スタッフと業務を分担、協働しながら進めていると回答した教職員の割合	90.0%	小 97.2%
		中 94.3%
		高 91.7%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 …年度内算定不可

■取組1 各種支援員・補助員等の配置

取組内容	評価	担当
支援スタッフの適正配置	A	幼保運営課
	A	教職員課
	S	教育支援課
	A	指導課
	A	市立高校
支援スタッフの専門性に応じた質的向上	A	教育支援課
	A	指導課
	S	教育センター
	A	市立高校
	A	中央図書館

■取組2 学校における諸課題への対応支援

取組内容	評価	担当
学校が抱える問題やトラブルの初期対応段階において、学校がとるべき法律上適切な対応についての助言等の実施	A	教育総務課
教職員の研修会における、法的側面からの指導・助言等の実施	A	教育総務課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：% 差[比較]:Pt

★学 校

Pick Up! 教職員と多様な支援スタッフが連携・協働するために、どのような取組をしましたか。
(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 始業式等で、名前を紹介した	56.9			53.7			64.6			0.0		
2. 始業式等で、対面で紹介した	27.1			27.4			27.1			0.0		
3. 学校だより等の便りで紹介した	41.7			44.2			37.5			0.0		
4. 必要に応じて会議に参加してもらった	49.3			47.4			54.2			100		
5. 該当なし	2.8			3.2			2.1			0.0		

★教職員

成果指標 様々な支援スタッフと業務を分担、協働しながら進めている。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	95.9					
小学校	97.2					
中学校	94.3					
高等学校	91.7					



成 果

支援スタッフの積極的な配置

研修体制の構築



課 題

校種間における情報共有や連携

協働に向けた会議等への参画促進

オンデマンド研修の継続的な改善

施策4 教職員がいきいきと働ける環境の整備

成果指標

	目標値	R7 年度
時間外在校等時間が年間 360 時間超の教職員の割合	0.0%	小 50.0% 中 67.7% 高 65.8%
時間外在校等時間が月 45 時間超の教職員の割合	0.0%	小 23.1% 中 45.5% 高 41.6%
ワーク・エンゲージメント（仕事に対して前向きで充実した心理状態）の質問に対する教職員の回答の値	小・中・高 5.0pt	小 4.7 pt 中 4.6 pt 高 4.5 pt

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 …年度内算定不可

■取組1 働き方改革と働きがい改革の一体的推進

取組内容	評価	担当
学校における働き方改革に関する取組状況の「見える化」と PDCA サイクルに基づいた取組の推進	A	教育総務課
保護者・地域・市長事務部局関係課との連携・協働による働き方改革の推進	A	教育総務課 幼保運営課
統合型校務支援システムの導入による業務改善	A	教育総務課
校務 DX に関する取組状況の「見える化」と PDCA サイクルに基づいた取組の推進	A	教育総務課
柔軟な働き方（早出遅出、フレックスタイムなど）を可能とする仕組みの研究	S	教職員課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：% 差[比較]:Pt

★教職員

Pick Up! 時間の使い方を意識した働き方に努めている。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	40.1	46.0	12.2	1.7
小学校	40.0	45.6	12.7	1.7
中学校	40.6	46.0	11.6	1.8
高等学校	33.3	56.7	8.3	1.7

Pick Up! 効率よく業務を進めるため、常に自分の業務を見直し、改善を図っている。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	38.2	49.3	11.8	0.7
小学校	36.9	50.3	12.0	0.7
中学校	40.5	47.5	11.3	0.6
高等学校	31.7	55.0	13.3	0.0

★保護者

Pick Up! お子さんの通っている学校の教職員の勤務時間を知っていますか。

対象	知っている	知らない
全体	24.3	74.3
小学校	25.5	73.0
中学校	23.5	75.3
高等学校	19.5	78.8



成 果

校務のデジタル化

柔軟な働き方の制度化



課 題

抜本的な業務削減の推進

保護者や地域への周知と理解促進

政策 4

安全・安心に学べるより良い教育環境の整備

施策 1 新しい時代の学びを実現する学校施設等の整備

成果指標

	目標値	R7 年度
コンピュータなどの ICT 機器の活用に関して、学校内外において十分に活用するサポートが受けられていると回答した学校の割合	小・中 100%	小 56.9% 中 60.5%
学校は勉強したり運動したりするのに適した道具が整っていたり、過ごしやすい施設になっていたりと回答した児童生徒の割合	維持 (R6 90.0%)	小 90.9% 中 91.2% 高 92.0%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ……年度内算定不可

■取組 1 新しい時代の学校施設整備

取組内容	評価	担当
「小中学校施設整備計画」に基づく計画的な施設整備の実施	A	教育施設課
幼稚園の規模適正化の方針を踏まえた保全改修等の実施	A	幼保運営課
高等学校施設の長寿命化に向けた計画的な保全改修等の実施	-	市立高校
空調設備の計画的な整備及び維持管理の実施	A	教育施設課
	B	市立高校
施設のバリアフリー化・照明 LED 化等の実施	A	教育施設課

■取組 2 学校における教材等の充実

取組内容	評価	担当
学習者用デジタル教科書の効果的な活用に対する事例周知と指導助言	A	教育センター
学習者用タブレット型端末の更新・保守	A	教育総務課
学習活動で利用する校内ネットワーク速度の確保	A	教育総務課
	A	市立高校
教育情報セキュリティの確保	A	教育総務課

■取組 3 学校規模の適正化

取組内容	評価	担当
学校規模適正化対象校の保護者等との意見交換の実施	A	教育総務課
統廃合検討開始目安の該当園の保護者等の意見交換の実施	A	幼保運営課

■取組 4 新たな学校の在り方に関する調査研究

取組内容	評価	担当
学年チーム担任制の在り方に関する調査研究	A	教職員課
ICT の利活用や新学習指導要領の方向性を踏まえた授業の在り方に関する調査研究	A	教育センター
	A	市立高校

★学 校

成果指標 タブレット型端末などの ICT 機器の活用に関して、学校内外において十分に活用するサポートが受けられていると思いますか。【小中学校のみ回答】

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	57.6					
小学校	56.9					
中学校	60.5					
高等学校	-					

Pick Up! タブレット型端末などの ICT 機器の活用に関して、学校内外において十分に活用するサポートが受けられていると思いますか。【小中学校のみ回答】

対象	そう思う	どちらかといえば、 そう思う	どちらかといえば、 そう思わない	そう思わない
全体	9.0	48.6	36.8	3.5
小学校	11.6	45.3	37.9	4.2
中学校	4.2	56.3	35.4	2.1
高等学校	-	-	-	-

★児童生徒

成果指標 あなたが通っている学校は、勉強したり運動したりする道具が整っていたり、過ごしやすい施設になっていたたりすると思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	91.1					
小学校	90.9					
中学校	91.2					
高等学校	92.0					



成 果

学習環境の整備

ICT 基盤の整備



課 題

ICT 活用のための日常的なサポート体制の構築

猛暑に対応した空調設備の早期設置と高等学校施設の計画的保全

施策2 学校安全の推進

成果指標

	目標値	R7 年度
学校管理下における事故発生率	前年比低下 (R6 全体 7.6%)	幼 2.0%
		小 5.8%
		中 9.8%
		高 6.5%
自分たちの安全を守ってくれている人や場所があることを知っている と回答した児童生徒の割合	90.0%	小 90.3%
		中 89.5%
		高 88.7%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 こどもを取り巻く環境を整える安全管理

取組内容	評価	担当
災害時・緊急時における連絡手段のデジタル化の推進	A	健康安全課
	A	幼保運営課
学校施設等の適切な維持管理等の実施	A	教育施設課
	A	幼保運営課

■取組2 校内の協力体制の構築

取組内容	評価	担当
各園における事故発生防止に関する組織体制の強化	A	幼保運営課
学校安全の3領域（生活安全・交通安全・災害安全）の充実に向けた学校安全担当の設置と支援	A	健康安全課
養護教諭補助員の配置及び研修の実施	A	教職員課
高等学校における学校安全に関する取組の充実に向けた支援	A	市立高校
食物アレルギー疾患対策に向けた学校への支援	A	健康安全課
緊急時における校内体制構築への支援	A	健康安全課

■取組3 多様な機関との連携

取組内容	評価	担当
学区内及び指定通学路の安全確保の推進	A	健康安全課
	A	幼保運営課
登下校中の見守り活動の推進	A	健康安全課
地域一体での見守り活動の実施	S	健康安全課
こどもの緊急避難場所「こども110番の家」登録者の協賛呼び掛け及びこどもへの広報活動の実施	A	青少年育成センター
地域と連携した交通安全街頭指導等の実施	A	市立高校
危機管理マニュアル（災害安全編）見直しへの指導、助言	A	健康安全課

■取組 4 安全・安心な給食の提供に関する環境整備

取組内容	評価	担当
学校給食における地場産物の活用	B	健康安全課
調理場の適切な維持管理	A	健康安全課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位: % 差[比較]: Pt

★学 校

Pick Up! 子供を災害や事故から守るために、どのような取組をしましたか。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 学校安全担当による、2つの危機管理マニュアルに基づく校内研修の強化	51.4			51.6			52.1			0.0		
2. 校内における実践的な防災訓練の実施	94.4			93.7			97.9			100		
3. 防災教育ポータルサイトを活用した、自助力・共助力の醸成	20.1			27.4			6.3			0.0		
4. 家庭における防災意識向上のための啓発	15.3			17.9			10.4			100		
5. 通学路における危険箇所の確認	72.9			76.8			66.7			0.0		
6. 交通安全教室の開催	92.4			96.8			85.4			100		
7. 学校運営協議会での、防災や交通安全に関する熟議の実施	29.9			32.6			25.0			0.0		
8. 該当なし	0.0			0.0			0.0			0.0		

★教職員

Pick Up! 災害や事故から命を守り、安全を確保するための方法について子供に指導している。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	66.3	32.0	1.6	0.2
小学校	72.3	27.0	0.7	0.1
中学校	58.9	38.2	2.6	0.3
高等学校	26.7	61.7	11.7	0.0

★児童生徒

成果指標 自分たちの安全を守ってくれている人や場所があることを知っていますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	89.8					
小学校	90.3					
中学校	89.5					
高等学校	88.7					

★保護者

Pick Up!

子供たちの安全を守ってくれている人や場所があることについて、お子さんと話をすることがあります。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	15.7	42.8	32.1	7.9
小学校	18.4	46.0	28.8	5.8
中学校	13.4	39.7	35.8	9.5
高等学校	8.8	38.9	31.9	16.8



成果

地域と連携した見守り活動の拡充

校内における安全指導



課題

家庭や地域を巻き込んだ防災意識の啓発

物価高騰下における給食環境の維持

施策3 中山間地域等における教育環境の向上

成果指標

	目標値	R7 年度
小規模校との意見交換の実施	100%	100%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 学びの支援

取組内容	評価	担当
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた取組の実施	B	教育センター

■取組2 通学等への支援

取組内容	評価	担当
統廃合地域における遠距離通園・通学に伴う通園・通学バス等の運行検討と運用	A	教育支援課
	A	幼保運営課
統廃合地域における遠距離通園通学に伴う援助費の支給	A	教育支援課
	A	幼保運営課
校(園)外学習への活用	A	教育支援課
	A	幼保運営課



成 果

統廃合地域における通園や通学支援

交通手段を活用した学習活動の推進



課 題

中山間地域におけるＩＣＴを活用した教育の推進

小規模校の実情に応じた継続的な支援

施策4 学びの機会確保に向けた支援

成果指標

	目標値	R7 年度
就学援助申請に対する補助充足率	100%	100%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 教育費負担軽減のための経済的支援

取組内容	評価	担当
就学に必要な費用の一部援助	A	教育支援課
奨学金の貸与	A	教育支援課

■取組2 義務教育の保障に向けた環境整備

取組内容	評価	担当
多様な学びの場や機会の確保に向けた検討	A	教育総務課
不就学等就学に課題を抱える外国人のこどもの学びの場の確保及び就学につなげるために必要な支援の実施	A	国際課



成果

教育費負担の軽減



課題

多様な学びの場の確保

施策5 いじめの問題への対応

成果指標

	目標値	R7 年度
いじめの問題に対して、外部人材と情報共有をしたり、協働したりして対応にあたることができたと回答した学校の割合	小・中・高 100%	小 85.2%
		中 85.4%
		高 100%
いじめ防止対策推進法に応じた対応を理解し、それに沿って行動していると回答した教職員の割合	小・中・高 100%	小 99.7%
		中 99.6%
		高 98.3%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ……年度内算定不可

■取組1 「浜松市いじめの防止等のための基本的な方針」の徹底

取組内容	評価	担当
「浜松市いじめの防止等のための基本的な方針（改定版）」の周知及び「学校いじめ防止基本方針」改定への指導助言	A	指導課
校内いじめ対応の中核となるいじめ対策コーディネーターの全校設置と研修の実施	A	指導課
いじめの問題に関する取組について PDCA サイクルの構築	A	指導課
総合教育会議や学校運営協議会等を通じた連携の促進	A	学校・地域連携課
	A	指導課
浜松市いじめ問題対策連絡協議会の開催	A	青少年育成センター

★学 校

Pick Up! いじめ対応への理解を深め、組織的な対応を促すためにどのような取組をしましたか。
(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. いじめ防止基本方針を理解し、いじめの未然防止・早期発見・早期対応について共通理解した	98.6			98.9			100			100		
2. 全保護者に対し、年度当初、学校のいじめ防止基本方針やその取組及び対応について周知した	89.6			96.8			77.1			0.0		
3. 地域の方に、たよりや学校運営協議会などの機会を活用して、いじめ防止基本方針やその取組及び対応について周知した	86.1			87.4			85.4			100		
4. 教育委員会主催の生徒指導研修等の内容について、校内でも周知を図った	69.4			71.5			66.7			100		
5. 定期的なアンケート等に記載された内容や子供や保護者からの相談について、複数で確認し、対応を協議したり進捗状況を共有したりした	96.5			97.9			95.8			100		
6. 事例研究等いじめに関する研修を行い、未然防止・早期発見・早期対応の視点から成果と課題を明らかにし、改善点について話し合った	59.0			63.2			52.1			0.0		
7. 該当なし	0.7			1.1			0.0			0.0		

成果指標 いじめの問題に対して、外部人材と情報共有をしたり、協働したりして対応にあたることができましたか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	84.7					
小学校	85.2					
中学校	85.4					
高等学校	100					

Pick Up! いじめの問題に対して、外部人材と情報共有をしたり、協働したりして対応にあたることができましたか。

対象	できた	どちらかといえば、できた	どちらかといえば、できなかった	できなかった
全体	37.5	47.2	12.5	2.1
小学校	32.6	52.6	12.6	2.1
中学校	47.9	37.5	12.5	2.1
高等学校	100	-	-	-

★教職員

Pick Up! いじめは、どんな理由があってもいけないことだと指導している。

対象	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
全体	95.4	4.5	0.1	0.0
小学校	97.1	2.8	0.1	0.0
中学校	93.4	6.5	0.1	0.0
高等学校	83.3	15.0	1.7	0.0

成果指標

いじめ防止対策推進法に応じた対応を理解し、それに沿って行動している。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	99.7					
小学校	99.7					
中学校	99.6					
高等学校	98.3					

★児童生徒

成果指標

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	96.2					
小学校	96.5					
中学校	95.8					
高等学校	95.6					

Pick Up!

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	79.3	16.9	2.7	1.2
小学校	81.3	15.2	2.4	1.1
中学校	77.2	18.6	3.1	1.2
高等学校	79.3	16.3	2.7	1.7

★保護者

Pick Up!

いじめはどんな理由があってもいけないことだと、お子さんに話をしていますか。

対象	している	どちらかといえば、 している	どちらかといえば、 していない	していない
全体	71.2	24.4	2.9	0.3
小学校	73.6	22.7	2.7	0.2
中学校	69.5	25.9	2.9	0.4
高等学校	61.9	30.1	6.2	0.9

Pick Up!

学校のいじめ防止基本方針を知っていますか。

対象	知っている	どちらかといえば、 知っている	どちらかといえば、 知らない	知らない
全体	14.1	35.7	32.3	16.5
小学校	14.9	36.6	32.0	15.2
中学校	13.6	34.8	32.4	17.3
高等学校	8.8	33.6	32.7	23.0



成 果

教職員の法令理解

家庭と学校における規範意識の育成



課 題

外部人材との連携強化

保護者や地域に対する基本方針の周知

いじめの複雑化に伴う教職員の負担軽減と人材の配置

政策5

多様な人材・主体との連携・協働

施策1 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進

成果指標

	目標値	R7 年度
コミュニティ・スクールなどの仕組みを生かし、保護者や地域と連携・協働して組織的に活動が行えるようになったと答えた学校の割合	小・中・高 90.0%	小 93.7%
		中 85.4%
		高 100%
学校や地域で子供を育むボランティア活動に参加してみたいと回答した保護者の割合	小・中・高 65.0%	小 45.8%
		中 42.1%
		高 42.4%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 コミュニティ・スクールの充実

取組内容	評価	担当
学校運営協議会の運営についての指導・助言	A	学校・地域連携課
CS 担当教師の設置及び CS ディレクター・学校支援コーディネーターの配置による組織的取組の推進	A	学校・地域連携課
学校評価の充実	A	学校・地域連携課
園評価の充実	A	幼保運営課

■取組2 地域学校協働活動の推進

取組内容	評価	担当
地域学校協働活動の推進体制のあり方及び効果的な活動支援の検討	A	学校・地域連携課
	A	創造都市・文化振興課
学校支援コーディネーターと協働センター等職員との連携促進	A	学校・地域連携課
	A	創造都市・文化振興課
協働センター等における地域人材情報の蓄積及び提供	A	創造都市・文化振興課

★学 校

成果指標 コミュニティ・スクールなどの仕組みを生かし、保護者や地域と連携・協働して組織的に活動が行えるようになったと思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	90.3					
小学校	93.7					
中学校	85.4					
高等学校	100					

Pick Up! コミュニティ・スクール等の仕組みを活用して、保護者や地域住民の意見を学校運営に反映していますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	50.0	45.1	3.5	0.7
小学校	52.6	45.3	2.1	0.0
中学校	45.8	45.8	6.3	2.1
高等学校	100	-	-	-

★児童生徒

Pick Up! 学習ボランティアなど、地域の方が学習に関わって（手助けして）してくれますか。

対象	関わって（手助け して）している	どちらかといえば、 関わって（手助け して）している	どちらかといえば、 関わって（手助け して）していない	関わって（手助け して）していない
全体	41.9	42.0	10.7	5.4
小学校	53.0	38.1	6.4	2.5
中学校	31.6	46.0	14.4	7.9
高等学校	21.3	40.3	22.7	15.7

★保護者

成果指標 学校や地域で子どもを育むボランティア活動に参加してみたい（参加している）と思いますか。

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	44.0					
小学校	45.8					
中学校	42.1					
高等学校	42.4					

Pick Up! 地域の中で子供たちが育てられていると感じていますか。

対象	感じている	どちらかといえば、 感じている	どちらかといえば、 感じていない	感じていない
全体	19.6	48.6	24.5	5.1
小学校	21.8	49.1	22.8	4.9
中学校	17.6	48.3	26.0	5.2
高等学校	14.2	46.9	29.2	6.2



成 果

コミュニティ・スクールと組織的な連携体制の構築

地域住民による学習支援の広がり



課 題

保護者のボランティア参加意欲の向上

校種間連携

施策2 魅力ある地域人材や団体等との連携

成果指標

	目標値	R7 年度
はままつ人づくりネットワークセンター登録講座の実施数	維持 (R6:1,309 回)	小 1,085 回 中 181 回 計 1,266 回
放課後や週末に何をして過ごすかという質問に対して、家庭で過ごしたり家族と過ごしたりする以外に他の人物や団体と接点を持っていると回答した児童生徒の割合	維持 (R6:90.2%)	小 87.4% 中 93.1% 高 86.3%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 NPO・企業・大学等と連携した体験活動等の充実

取組内容	評価	担当
はままつ人づくりネットワークセンターの充実	A	学校・地域連携課
地域と連携したこどもへのあいさつや声掛けの実施促進	A	青少年育成センター

■取組2 地域スポーツクラブ活動・地域文化クラブ活動への移行に向けた環境整備

取組内容	評価	担当
「休日の部活動の地域移行に関するガイドライン」の策定とそれに基づく進捗管理	A	学校・地域連携課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：％ 差[比較]:Pt

★児童生徒

成果指標 あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか。当てはまる番号をすべて選んでください。(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 家族と過ごしている	73.3			78.0			69.2			58.0		
2. 家で勉強や読書をしている	41.8			43.2			40.0			49.7		
3. 家でテレビや動画をみたり、ゲームをしたり、SNS を利用したりしている	86.6			83.3			90.2			83.3		
4. 学習塾など学校や家以外の場所で勉強している	24.3			19.1			29.4			29.3		
5. 習い事(スポーツに関する習い事を除く)をしている	32.8			41.2			25.3			11.7		
6. スポーツ(スポーツに関する習い事を含む)をしている	43.5			49.1			39.4			14.3		
7. 友達と遊んでいる	62.6			62.8			63.7			36.3		
8. 地域の行事に参加している(地域学校協働本部や地域住民などによる学習・体験プログラムを含む)	5.6			8.1			3.1			2.3		
9. (小)放課後子ども教室や放課後児童教室に参加している (中・高)学校の部活動に参加している	-			3.8			64.6			66.3		
10. 1～9 に当てはまるものがない	-			1.5			1.3			1.3		



成 果

地域人材を活用した見守り体制

部活動の地域移行に向けた指針の策定



課 題

多様な体験機会の提供

部活動の地域移行に伴う持続可能な受け皿の確保

施策3 家庭教育支援の推進

成果指標

	目標値	R7 年度
市・教育委員会・学校から配付される冊子やリーフレット、保護者を対象とした家庭教育に関する講座は、子育てをするうえで参考になると回答した保護者の割合	70%	小 58.9% 中 54.0%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 ―…年度内算定不可

■取組1 家庭教育力向上に向けた支援

取組内容	評価	担当
全国学力・学習状況調査の結果分析の周知	A	教育センター
家庭教育講座の実施	A	学校・地域連携課
命を大切に作る心や規範意識の向上に向けた啓発	A	教育センター
学校いじめ防止基本方針・いじめの理解と未然防止等の理解を促す広報活動の実施	A	指導課
家庭における人権意識育成のための支援	A	人権啓発センター
保護者を対象とした青少年の健全育成に関する啓発	A	青少年育成センター
朝食摂取指導の促進	A	健康安全課
「はますくノート(ファイル)」における「家庭で大切にしたい子育てのポイント」の周知	A	幼保運営課

《実態把握調査結果(抜粋)》 単位：% 差[比較]:Pt

★学 校

Pick Up! 家庭の教育力を向上させるために、保護者に対しどのようなことを働き掛けましたか。
(複数回答可)

選択肢	全体			小学校			中学校			高等学校		
	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差	R7	R8	差
1. 「早寝・早起き・朝ごはん」や挨拶など、基本的な生活習慣に関すること	84.7			91.6			72.9			100		
2. 会話や悩み相談など、子供とのかかわり方に関すること	45.1			48.4			39.6			0.0		
3. テレビやゲーム、ICT機器の家庭での使い方に関すること	72.2			74.7			68.8			100		
4. 家族の一員としての在り方に関すること	29.9			29.5			31.3			0.0		
5. 地域行事やボランティア活動への参加に関すること	29.2			23.2			41.7			100		
6. 該当なし	0.7			0.0			2.1			0.0		

★保護者

成果指標

市・教育委員会・学校から配付される冊子やリーフレット、保護者を対象とした家庭教育に関する講座は、子育てをするうえで参考になりましたか。【小中学生のみ回答】

対象	R 7	R 8	R 9	R10	R11	差⇔R 7
全体	56.6					
小学校	58.9					
中学校	54.0					
高等学校	-					

Pick Up!

お子さんのよい表れを見つけ、ほめていますか。

対象	当てはまる	どちらかといえば、 当てはまる	どちらかといえば、 当てはまらない	当てはまらない
全体	51.0	44.8	2.6	0.1
小学校	53.5	43.1	2.3	0.1
中学校	49.0	46.1	2.8	0.1
高等学校	43.4	50.4	4.4	0.9

Pick Up!

お子さんが、規則正しい生活を送ることができるよう声かけしていますか。

対象	している	どちらかといえば、 している	どちらかといえば、 していない	していない
全体	59.5	37.2	2.1	0.2
小学校	63.2	34.1	1.8	0.1
中学校	56.3	39.9	2.5	0.4
高等学校	51.3	46.0	1.8	0.0

Pick Up!

一日の出来事についてお子さんから話を聞いていますか。

対象	聞いている	どちらかといえば、 聞いている	どちらかといえば、 聞いていない	聞いていない
全体	50.1	40.3	7.5	1.0
小学校	53.7	39.8	5.0	0.5
中学校	46.6	40.7	10.1	1.4
高等学校	44.2	43.4	8.8	2.7



成 果

家庭における基本的生活習慣

多様なニーズに応じた家庭教育支援の着実な展開



課 題

啓発資料や学習講座の実効性と満足度の向上

社会性や自立心を育む幅広い視点からの働きかけの充実

施策4 放課後の居場所づくり

成果指標

	目標値	R7 年度
放課後児童会の定員数	小学校該当児童 100%	小学校該当児童 100.3%

《取組状況調査結果》 評価：S…計画より進んでいる A…計画どおり B…遅れている C…未実施 —…年度内算定不可

■取組1 放課後児童会の運営支援

取組内容	評価	担当
学校施設等の活用検討	A	学校・地域連携課
民間事業者の参入促進	A	学校・地域連携課
支援員等の質的向上に向けた支援	A	学校・地域連携課
事業者への児童会運営への指導・助言	A	学校・地域連携課

■取組2 こどもの居場所づくりに向けた支援

取組内容	評価	担当
「放課後子供たちの居場所づくり事業」への補助	A	学校・地域連携課
「放課後子供教室」の実施	A	学校・地域連携課



成 果

放課後児童会の受け皿の拡大

安全な運営体制の構築



課 題

地域ごとの需要に応じた整備

放課後の居場所の拡充

第3章 有識者の分析

日本女子大学 人間社会学部 教授 山下 絢 氏

第4次浜松市教育総合計画・実態把握調査の結果概要 －理念・コンセプト・目指す姿を中心に－

【要約】

(1) 学校段階による変化について

学校生活への評価は概ね肯定的だが、学年が上がるにつれて肯定感や意見表明の割合が低下する傾向にある。

(2) 不登校（30日以上欠席）について

不登校はだれもが当事者になり得ると言われるが、実際には家庭の所得階層などに関連し、偏在している。(3)睡眠リズムの影響について：学校段階にかかわらず就寝リズムの安定に課題があり、また、不登校層では睡眠のリズムの不規則が顕著である。

1. 主たる分析結果

(1) 保護者からみた学校生活への評価

①登校期待感：学校段階が上がるほど強い肯定は低下

子どもが学校を楽しみにしているかについては、いずれの学校段階でも肯定的回答が多数を占めた。ただし、「当てはまる」は小学校 42.8%、中学校 35.0%、高校 33.6%と低下しており、学校段階が上がるほど強い肯定は弱まる傾向がみられる。

②教師による承認：高校段階で強い肯定が大きく低下

教師が子どものよいところを認めているかについても肯定的回答は多いが、「当てはまる」は小学校 54.3%、中学校 44.4%、高校 24.5%と低下した。特に高校では、強い肯定よりも「どちらかといえば当てはまる」に回答が集中している。

③学校への信頼：子どもの様子と教師との関係が最大の理由

学校を信頼する理由としては、「子どもが生き生きとして学校に通っている」が約 65%で最も多く、次いで「教師が、わが子のことをよく理解している」が約 56%であった。学校への信頼は、子どもの日々の様子や教師との関係を通じて形成されている。

(2) 児童生徒からみた自己認識と学校生活

①将来展望：肯定的回答は多いが強い肯定は低下

将来の夢や目標については、肯定的回答が全体の約 8割を占めた。一方、「当てはまる」は小学校 57.5%、中学校 36.0%、高校 32.7%と低下しており、学校段階が上がるにつれて将来展望への強い肯定は弱まっている。

②自己肯定感・教師承認：全体として高い水準

自己肯定感は小学校 88.4%、中学校 85.9%、高校 89.3%と、いずれの学校段階でも高かった。教師が自分のよいところを認めているかについても、肯定的回答は小学校 92.8%、中学校 93.9%、高校 89.0%と高い水準にある。

③意見表明：学校段階が上がるほど低下

学校生活に関する要望を先生や学校の大人に「伝えている」は全体で 15.6%と低調であった。肯定的回答も小学校 45.8%、中学校 43.8%、高校 32.0%と低下しており、子どもが意見や要望を表明しやすい環境づくりには課題がある。

(3) 社会経済的背景の視点から

①学校生活の評価は親学歴と関連(小学校)

小学校段階では、親の学歴が高いほど学校生活を肯定的に評価する傾向が確認された。一方、中学校・高校では同様の関連は明確ではなく、世帯年収との関連も一貫していなかった。

②不登校と所得階層による差がみられる(中学校)

学校段階では、親大卒者数や世帯年収と不登校との明確な関連は確認されなかった。一方、中学校段階では、世帯年収との関連が示された。

(4) 不登校に関わる要因

①欠席日数：中学校で長期欠席の割合が相対的に高い

欠席日数は、すべての学校段階で「1～5日」が最も多かった。一方、「30日以上」は中学校で 5.6%と最も高く、中学校段階では長期欠席に該当する層がやや多い傾向がみられる。

②児童生徒調査から：自己肯定感・教師承認・生活リズムが関連

小学生では、「自分にはよいところがある」と「起床時刻の規則性」が不登校のなりやすさ（オッズの低さと有意に関連していた。中学生では、これらに加えて教師の承認ことも有意に関連していた。

③保護者調査から：不登校になる可能性は同じではなく、所得階層によって偏在

保護者調査では、小学生では有意な関連は確認されなかったが、中学生では、世帯所得の高さ、教師の肯定的承認が、不登校のなりやすさ（オッズ）の低さと関連していた。

(5) 睡眠

①睡眠の規則性：就寝リズムに課題

同じ時刻に起床している割合は小学校 56.4%、中学校 58.4%で大きな差はみられなかった。一方、同じ時刻に就寝時している割合は小学校 42.0%、中学校 40.4%にとどまり、就寝リズムの安定に課題がある。

②不登校との関連：不登校層では生活リズムが不安定

不登校の児童生徒では、同じ時刻に起床している割合が 31.3%、同じ時刻に就寝している割合が 24.7%にとどまり、不登校でない児童生徒より低かった。生活リズムの乱れと不登校との関連が示唆される。

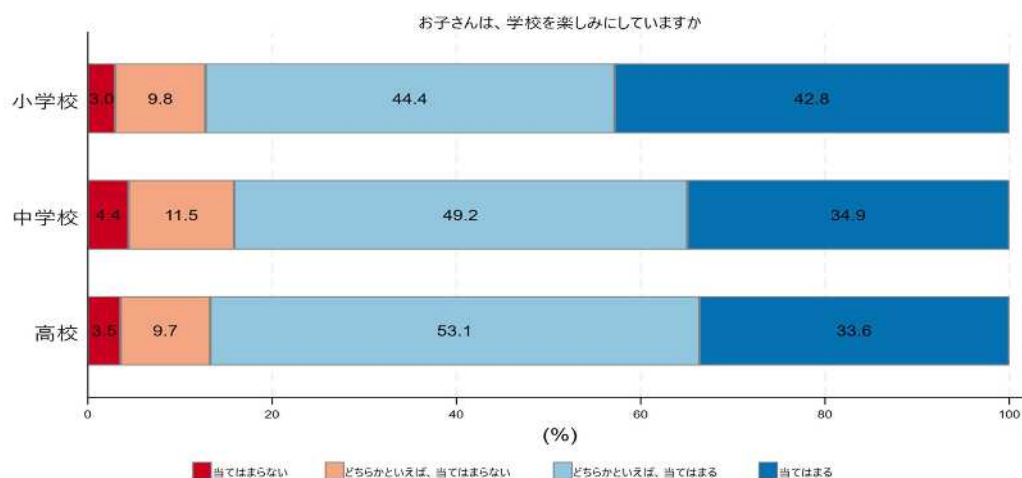
③メディア利用との関連：長時間利用ほど規則性が低い

スクリーンタイムが長いほど、起床・就寝時刻の規則性は低い傾向にある。特に3時間以上使用する層では、同じ時刻に就寝している割合が33.4%にとどまり、長時間のメディア利用は就寝リズムの不安定さと関連している。

2. 各分析結果

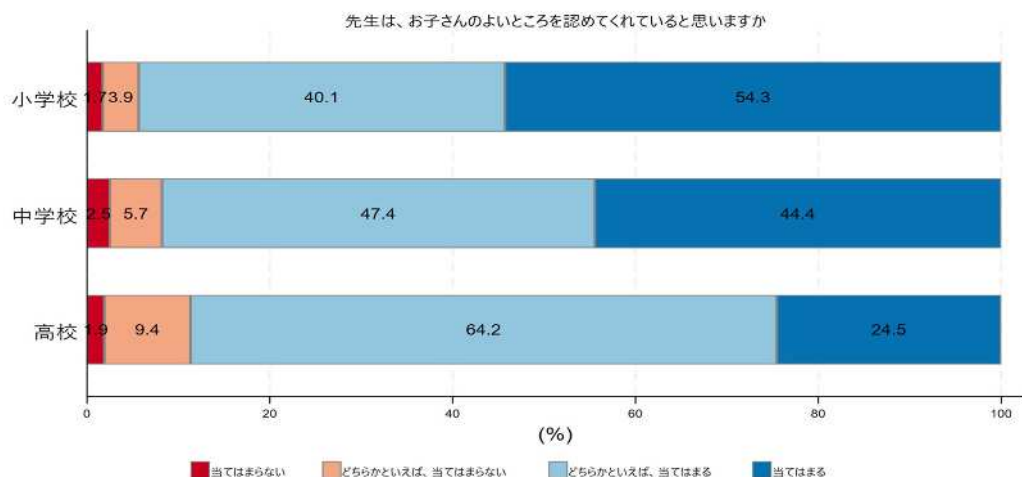
登校期待感(保護者調査より)

学校を楽しみにしているかについては、いずれの学校段階でも肯定的回答が大多数を占めていた。ただし、「当てはまる」の割合は小学校42.8%、中学校34.9%、高校33.6%と、学校段階が上がるにつれて低下していた。一方、「どちらかといえば、当てはまる」は中学校・高校で高く、強い肯定からやや弱い肯定へ移行する傾向が示された。



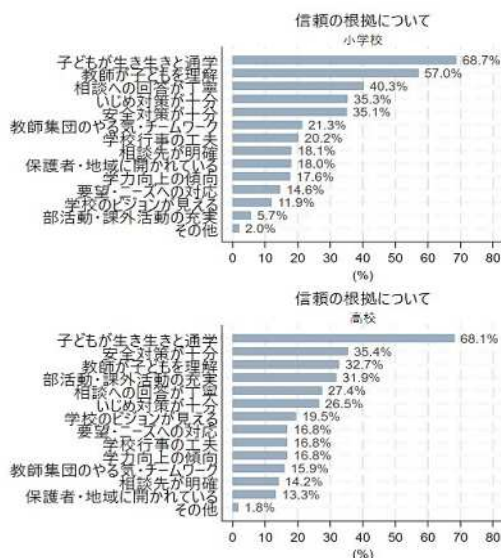
教師による子どもの肯定的承認(保護者調査より)

先生が子どものよいところを認めてくれているかについては、いずれの学校段階でも肯定的回答が大多数を占めていた。ただし、「当てはまる」の割合は小学校54.3%、中学校44.4%、高校24.5%と、学校段階が上がるにつれて低下していた。一方、高校では「どちらかといえば、当てはまる」が64.2%と高く、強い肯定よりもやや弱い肯定に回答が集中していた。



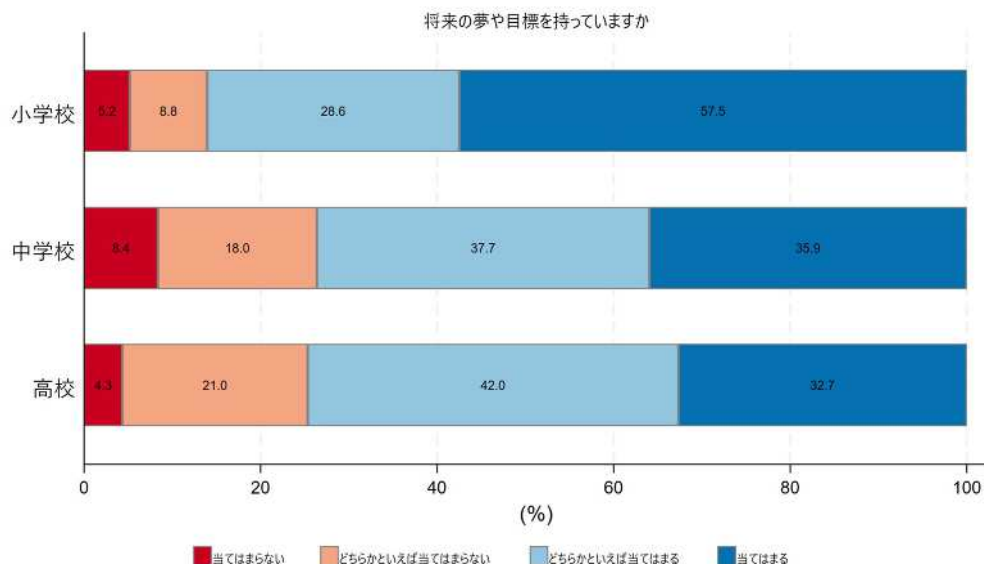
保護者からみた学校信頼の条件(保護者調査より)

学校を信頼する根拠としては、「子どもが生き生きとして学校に通っている」が最も多く、約 65%であった。次いで、「教師が、わが子のことをよく理解している」が約 56%であった。一方、「学校としてのビジョンが保護者に見える」「学校が保護者の要望やニーズに応えてくれる」など、学校経営や保護者対応に関する項目の選択率は相対的に低かった。学校段階別には、高校で「教師がわが子を理解している」の割合が低く、「部活動や課外活動が充実している」の割合が高いという特徴がみられた。



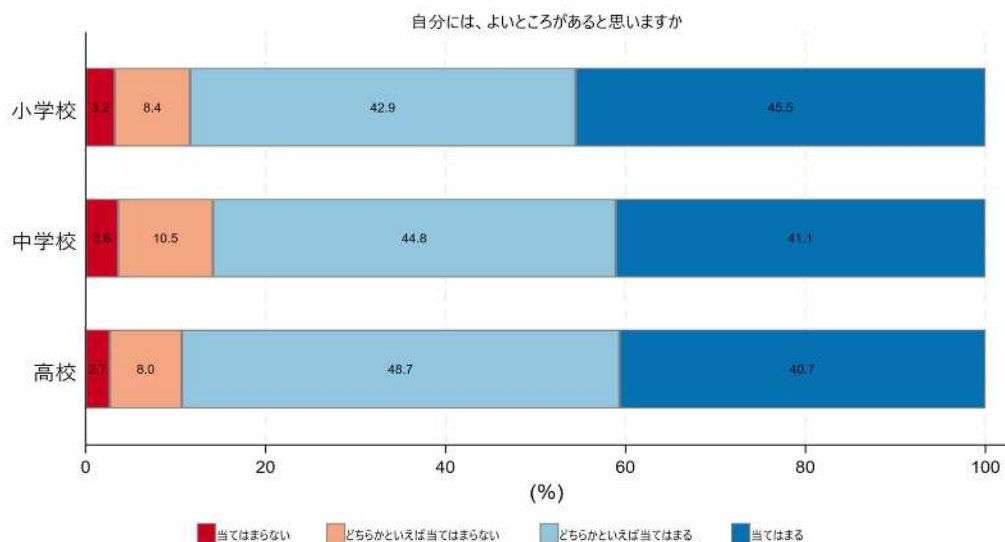
将来展望(児童生徒調査より)

将来の夢や目標については、全体では「当てはまる」が46.5%、「どちらかといえば当てはまる」が33.3%であり、肯定的回答が約8割を占めていた。ただし、「当てはまる」の割合は小学校57.5%から中学校36.0%、高校32.7%へと低下しており、学校段階が上がるにつれて強い肯定が弱まる傾向がみられた。



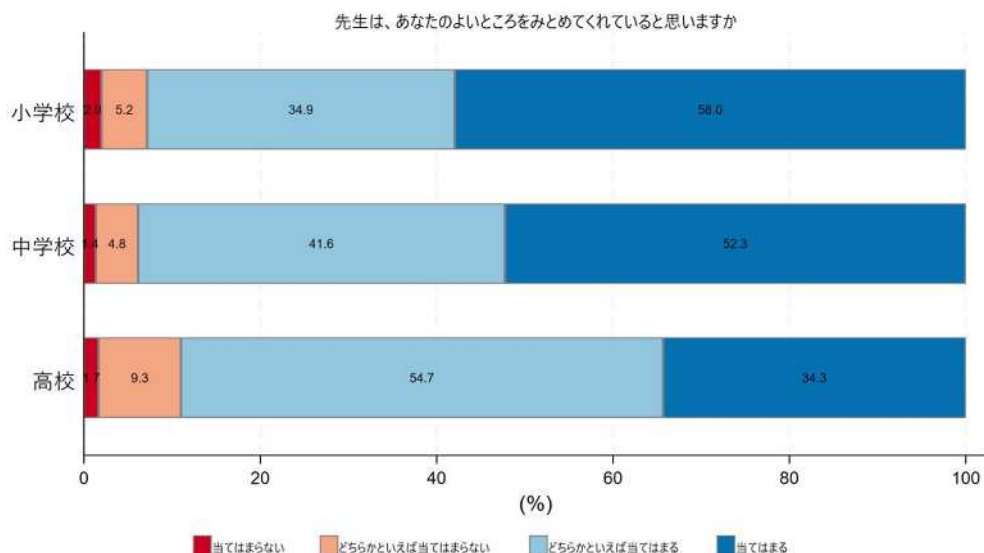
自己肯定感(児童生徒調査より)

自分にはよいところがあると思うかについては、肯定的回答が小学校88.4%、中学校85.9%、高校89.3%と、いずれの学校段階でも高かった。ただし、「当てはまる」の割合は小学校45.5%、中学校41.1%、高校40.7%であり、小学校でやや高く、中学校・高校では「どちらかといえば当てはまる」に回答がやや移行していた。



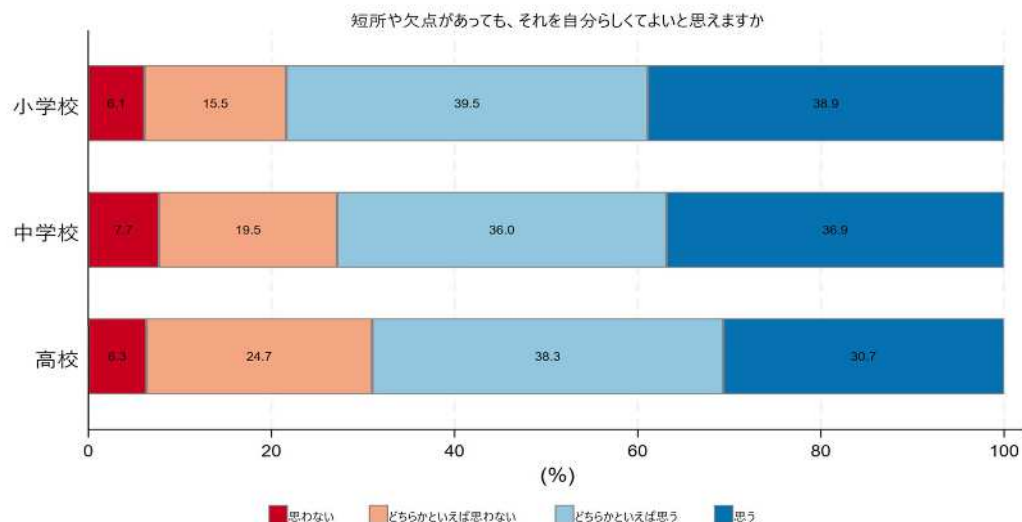
教師の肯定的承認(児童生徒調査より)

先生が自分のよいところを認めてくれているかについては、肯定的回答が小学校92.8%、中学校93.9%、高校89.0%と、いずれの学校段階でも高かった。ただし、「当てはまる」の割合は小学校58.0%、中学校52.3%、高校34.3%へと低下しており、高校では「どちらかといえば当てはまる」に回答が集中していた。



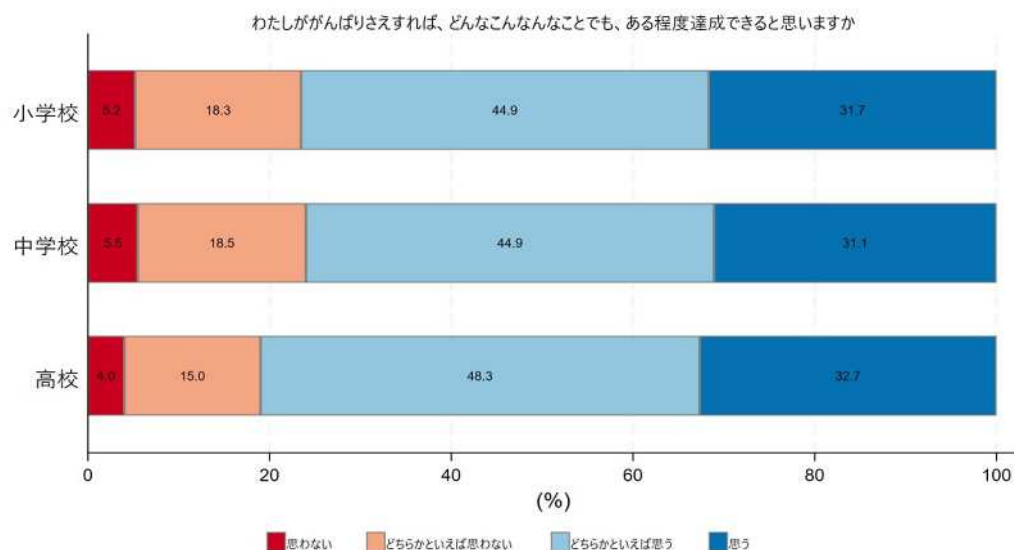
自己受容(児童生徒調査より)

自分の短所や欠点を自分らしさとして受け入れられるかについては、肯定的回答が小学校78.4%、中学校72.8%、高校69.0%であり、いずれの学校段階でも多数を占めていた。ただし、「思う」の割合は小学校38.9%、中学校36.9%、高校30.7%と低下しており、学校段階が上がるほど自己受容に否定的な回答が増える傾向がみられた。



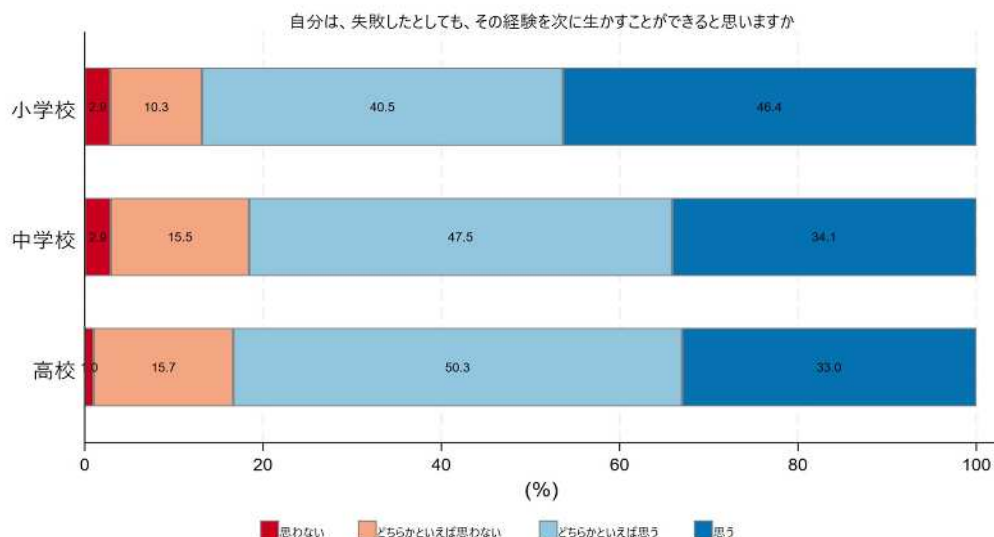
自己効力感(児童生徒調査より)

努力すれば困難なことでもある程度達成できると思うかについては、肯定的回答が小学校76.6%、中学校76.0%、高校81.0%であり、いずれの学校段階でも高かった。特に「どちらかといえば思う」が全体で45.0%と最も多く、学校段階による大きな差はみられなかった。



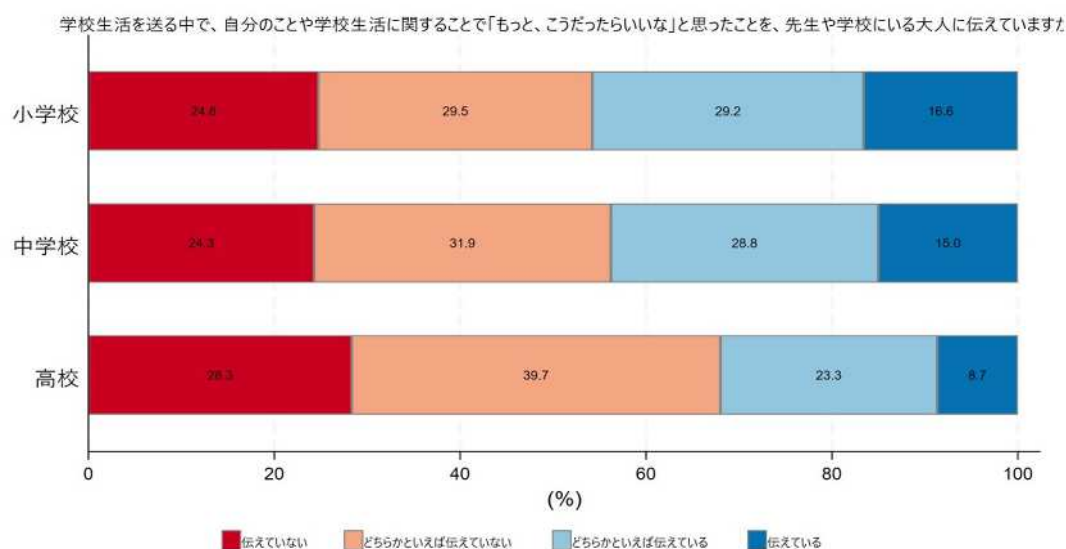
レジリエンス(逆境からの回復) (児童生徒調査より)

失敗経験を次に生かせると思うかについては、肯定的回答が小学校86.9%、中学校81.6%、高校83.3%と、いずれの学校段階でも高かった。ただし、「思う」の割合は小学校46.4%に対し、中学校34.1%、高校33.0%と低く、学校段階が上がるにつれて強い肯定が弱まる傾向がみられた。



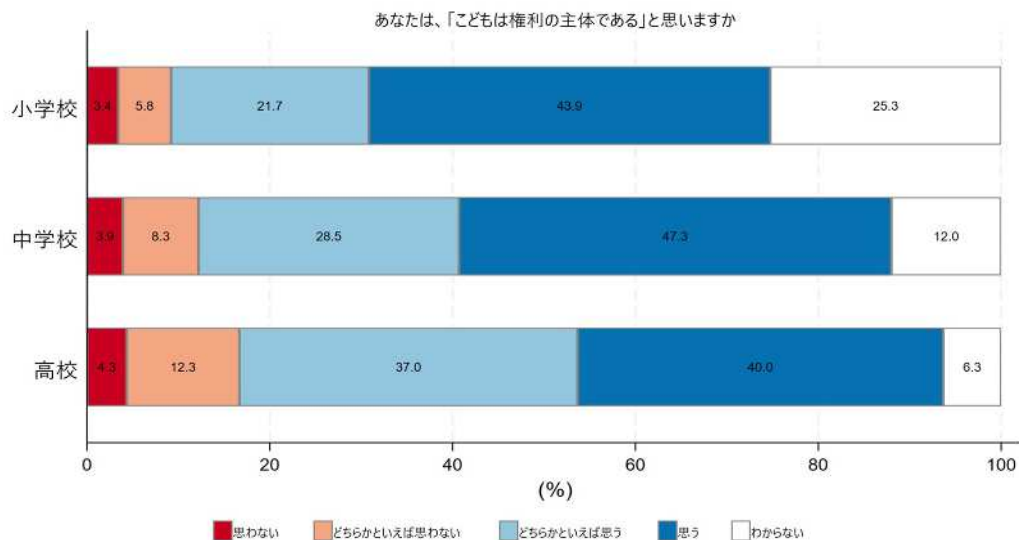
子どもの意見表明(児童生徒調査より)

学校生活に関する要望を先生や学校の大人に伝えているかについては、「伝えている」が全体で5.6%にとどまった。肯定的回答は小学校45.8%、中学校43.8%、高校32.0%であり、学校段階が上がるほど低下していた。特に高校では「伝えていない」「どちらかといえば伝えていない」が合計8.0%を占め、要望や意見を学校に伝える児童生徒が相対的に少ないことが示された。



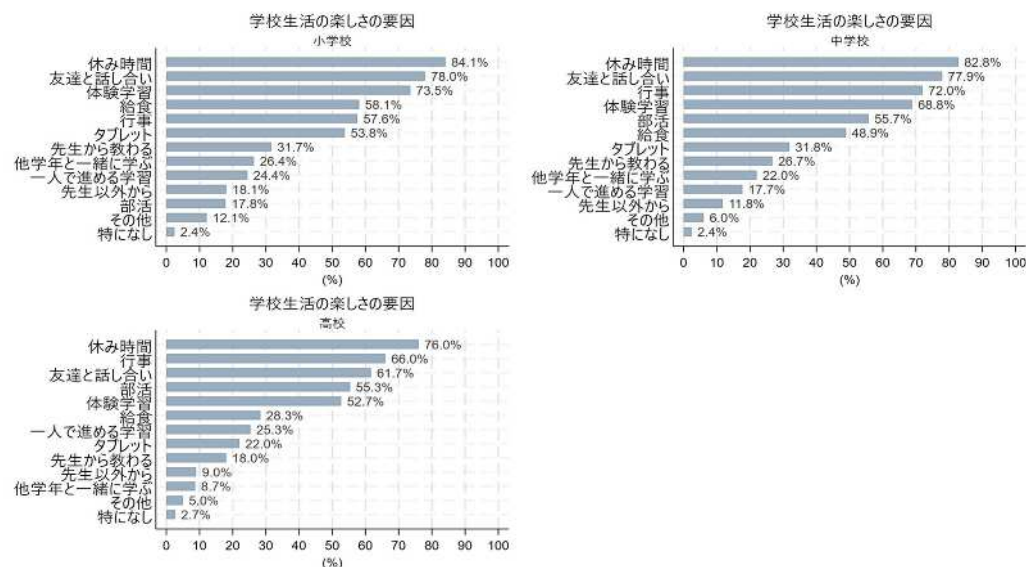
子どもの権利主体性(児童生徒調査より)

「こどもは権利の主体である」と思うかについては、肯定的回答が小学校65.6%、中学校75.8%、高校77.0%であり、学校段階が上がるほど高かった。一方、「わからない」は小学校25.3%、中学校12.0%、高校6.3%と低下しており、学校段階が上がるにつれて子どもの権利に関する認識がより明確になる傾向がみられた。



学校生活の楽しさの要因(児童生徒調査より)

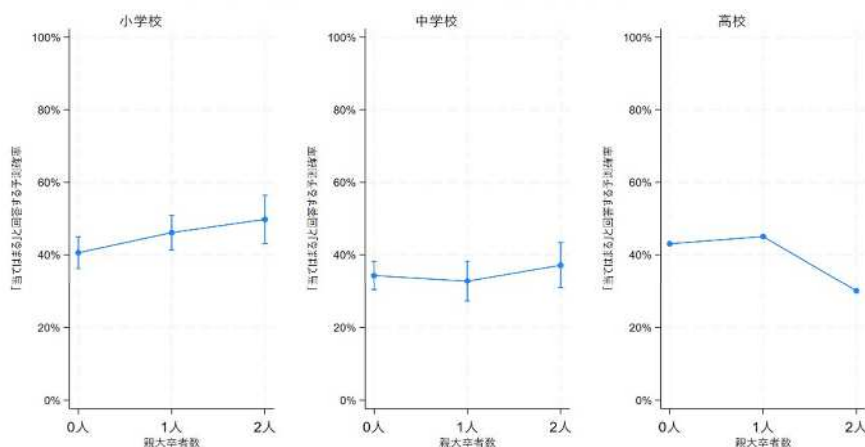
学校が楽しいと感じる場面は、全体では「休み時間」「友達と話し合いながら進める学習」「体験学習」「行事」が中心であった。小学校では給食やCTを使った学習も比較的高く、中学校・高校では行事や部活動の割合が高かった。全体として、学校の楽しさは、教師から教わる学習よりも、友人との関わり、体験的活動、休み時間、行事・部活動などの学校生活上の経験と強く結びついていることが示された。



登校期待感 × SES (保護者調査より)

小学校段階では、親の学歴が高いほど学校生活を肯定的に評価する傾向が確認された。ただし、中学校・高校では同様の関連は確認されず、世帯年収についても一貫した有意な関連はみられなかった(5%水準)。以上から、家庭背景と学校生活への肯定的評価との関連は、少なくとも本分析では小学校段階において相対的に明確である一方、その効果量や説明力は限定的であると解釈できる。

親大卒者数と「当てはまる」と回答する予測確率

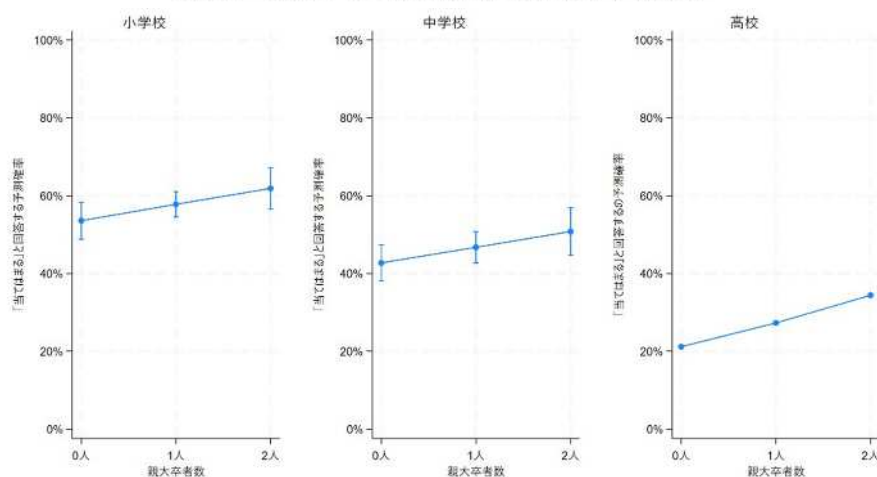


分析は、被説明変数に登校期待感、説明変数に親の大卒者数(ダミー)、世帯所得の四分位(ダミー)を設定した順序ロジットモデルによって行われた。

教師による子どもの肯定的承認 × SES (保護者調査より)

小学校・中学校のいずれにおいても、親の学歴が高いほど肯定的に評価する傾向が確認された(5%水準)。一方、世帯年収については、小学校では第2四分位が負、中学校では第3四分位が正の関連を示したものの、第4四分位ではいずれの学校段階でも有意な関連は確認されず、所得階層に応じた一貫した傾向はみられなかった。

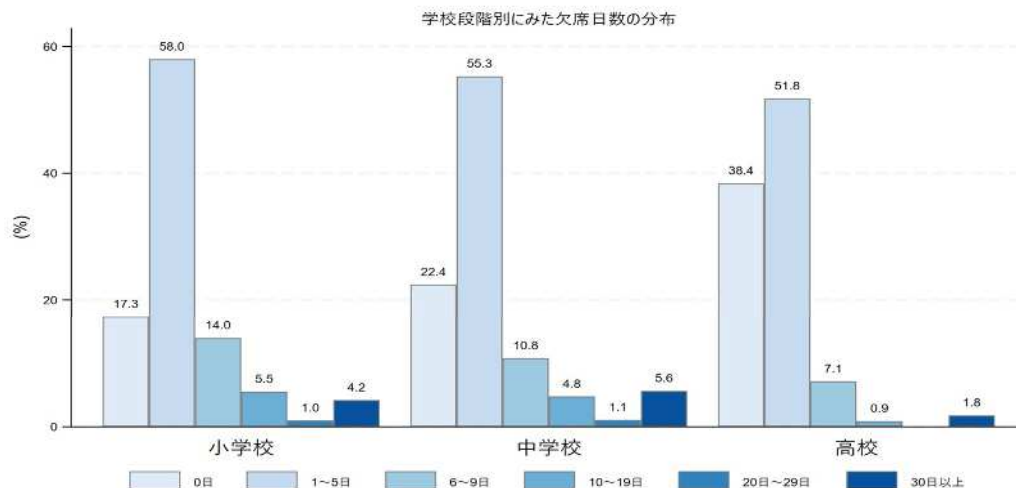
親大卒者数と「当てはまる」と回答するの予測確率



分析は、被説明変数に教師による子どもの肯定的承認、説明変数に親の大卒者数(ダミー)、世帯所得の四分位(ダミー)を設定した順序ロジットモデルによって行われた。

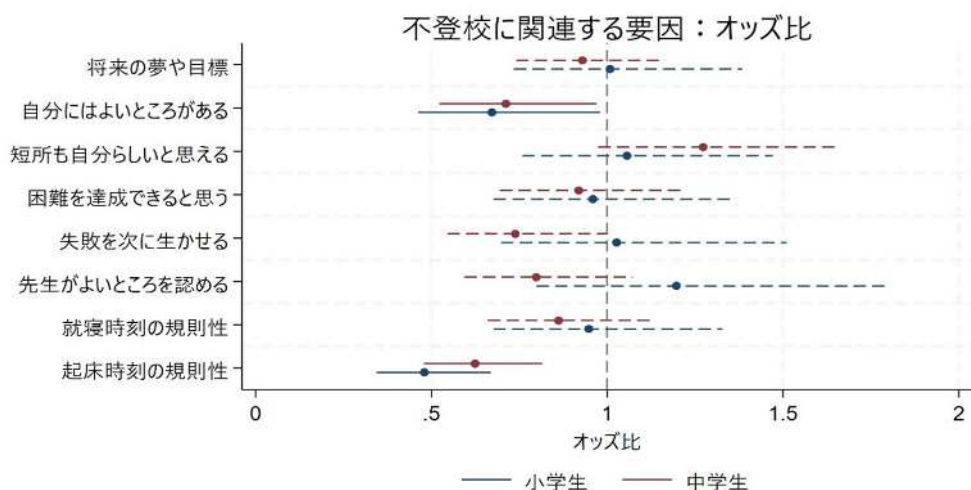
長期欠席の実態(保護者調査より)

欠席日数は、すべての学校段階で「1～5日」が最も多かった。ただし、「0日」の割合は高校で38.4%と高く、小学校・中学校よりも欠席が少ない層が多かった。一方、「30日以上」は中学校で5.6%と最も高く、中学校では長期欠席に該当する層が相対的に多い傾向がみられた。



不登校の要因分析(児童生徒調査より)

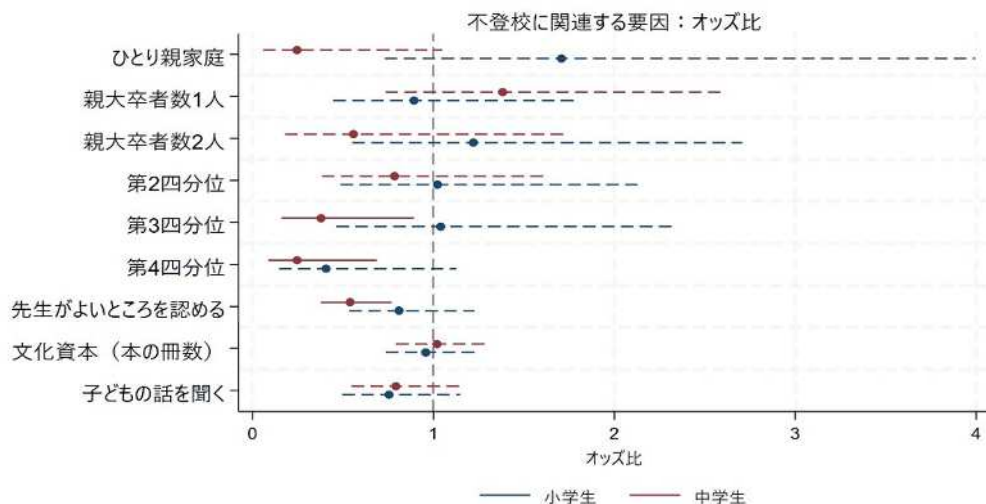
不登校(30日以上欠席)の要因については、小学生では、「自分にはよいところがある」と「起床時刻の規則性」が5%水準で有意に不登校のなりやすさ(オッズ)を低下させている。中学生では、「自分にはよいところがある」「先生がよいところを認める」「起床時刻の規則性」が有意に低いオッズと関連している。全体として、自己肯定感、教師からの承認、生活リズムが不登校と関連していることが示唆される。



青は小学生を、赤は中学生を示している。実線は5%水準で有意、点線は非有意を示す。分析は、不登校の有無を被説明変数とする二項ロジットモデルによって行われた。

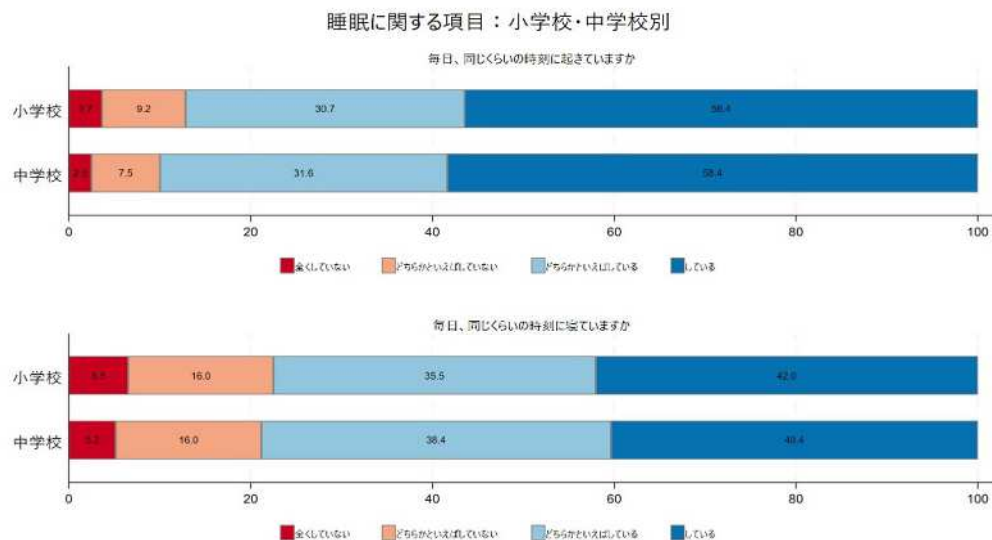
不登校の要因分析(保護者調査より)

小学生では、いずれの変数も5%水準で有意な関連は確認されない。中学生では、第3四分位(中上位25%相当層)・第4四分位(上位25%相当層)の世帯所得が第1四分位に比べて、不登校のなりやすさ(オッズ)を有意に低下させている。また、先生が子どものよいところを認めていることも、中学生の不登校オッズの低さと有意に関連している。一方、ひとり親家庭、親大卒者数、文化資本、子どもの話を聞くことは、小中いずれでも有意ではない。以上から、不登校は誰にでも起こりうる一方で、そのリスクは所得階層によって必ずしも均等ではないことが示唆される。



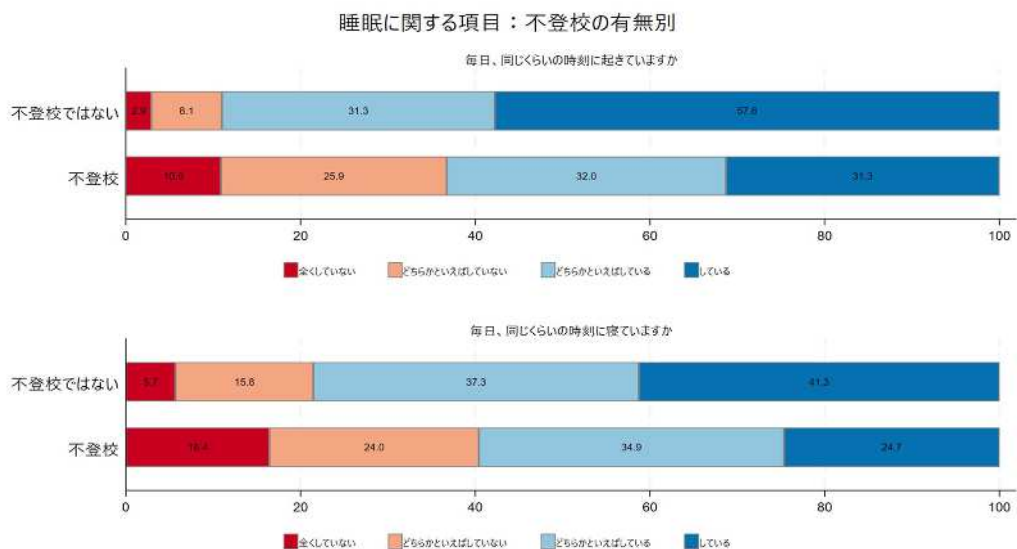
睡眠の規則性×学校段階別(児童生徒調査より)

小学校・中学校別にみると、起床時刻の規則性は両段階で高く、同じ時間に起きている割合は小学校56.4%、中学校58.4%で大きな差はみられない。同じ時間に就寝している割合も、は小学校42.0%、中学校40.4%とほぼ同水準である。ただし、就寝時刻は起床時刻に比べて同じ時間である割合が低く、学校段階にかかわらず、就寝リズムの安定に課題があることが示唆される。



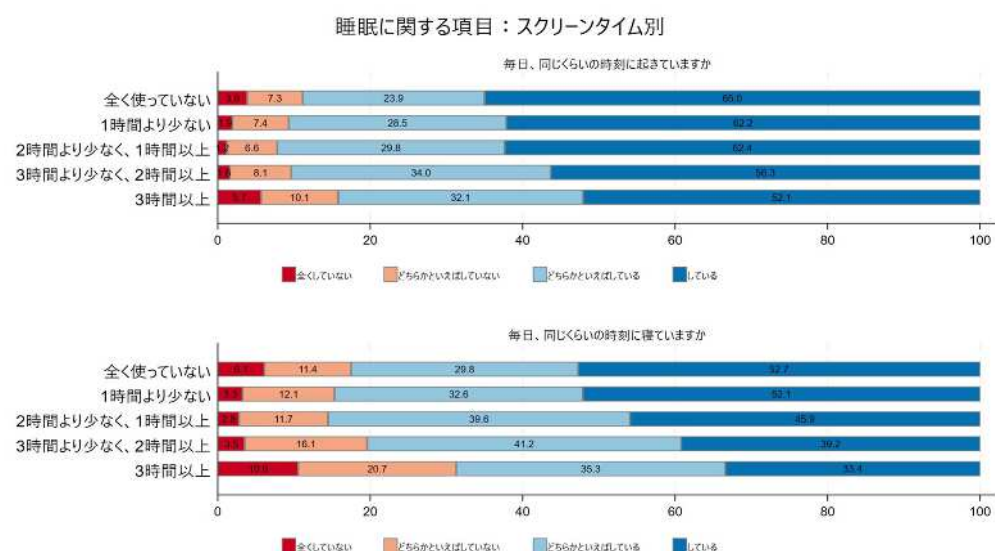
睡眠の規則正しさ×不登校の有無別（児童生徒調査より）

不登校の児童生徒は、不登校でない児童生徒に比べて、起床・就寝時刻の規則性が低い傾向にある。起床時刻については、同じ時刻である割合が不登校でない児童生徒では57.8%であるのに対し、不登校では31.3%にとどまる。就寝時刻でも同様に、同じ時刻である割合は41.3%から24.7%へ低下している。一方、不規則な割合は不登校で高く、生活リズムの乱れが不登校と関連していることが示唆される。



睡眠の規則正しさ×メディアの利用（児童生徒調査より）

スクリーンタイムが長いほど、起床・就寝時刻の規則性が低い傾向がみられる。特に「3時間以上」使用する層では、起床時刻が同じ割合は52.1%、就寝時刻が同じ割合は33.4%にとどまり、未使用層より低い。一方、同じ時刻でない割合は起床5.7%、就寝10.6%と高い。長時間利用は、生活リズムの乱れ、とくに就寝リズムの不安定さと関連していることが示唆される。



3. 使用データ

【調査名】第4次浜松市教育総合計画「実態把握調査」

【調査方法】web 調査

【調査主体】浜松市教育委員会

【調査時期】2026 年 2 月

【調査対象】①児童生徒（市内の小学5年、中学2年、高校2年）
②保護者（対象児童の保護者）

保護者調査の回収状況		小学校	中学校	高等学校	合計
	回答数	1,532	1,415	113	3,060
	対象児童生徒	6,519	6,596	371	13,486
	回答率	23.5%	21.5%	30.5%	22.7%
児童生徒調査の回収状況		小学校	中学校	高等学校	合計
	回答数	5,806	5,675	300	11,781
	対象児童生徒	6,519	6,596	371	13,486
	回答率	89.1%	86.0%	80.9%	87.4%

4. 今後の調査上の課題

(1) 児童生徒 ID の欠損

保護者調査における児童生徒調査の ID が多く、児童生徒調査データとの接続ができなかった。今後は、保護者調査における児童生徒 ID の欠損を減らしていくことが課題である。

(2) 家計状況について

教育格差の是正の視点からは、所得状況に加えて、就学援助を受けているか否かが把握できればより理想的であり、今後の課題である。

(3) 中山間地域等について

今回の調査データからは、中山間地域であるか否かは特定できず、データから中山間地域の教育実態を明らかにすることはできなかった。

(4) 複数回の回答

今回の調査では、複数回答が数件あった。今回は、複数回答がある場合は、最初に回答したものを分析対象とした。今後は、複数回答ができないような設定が必要である。

（山下 絢）

不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒の
「困難さ」—浜松市令和7年度「実態把握調査」の分析—

1. はじめに

第4次浜松市教育総合計画では、政策2として「多様なニーズに対応した学びや支援の充実」を掲げられている。個々のこどもがそれぞれ異なるため、多様なこどもたちを包摂する学校教育環境は、特定の背景や特性をもつこどもたちに限らず、すべてのこどもたちにとって求められていることだろう。しかし、特に大きな困難を抱えていると想定されるこどもたちへの対応も重要であり、ときとしてそれが優先的な課題となる場合もある。そのため総合計画の中の政策2では、特別な支援を必要とするこども、不登校児童生徒、外国につながるこどもへの対応が特筆されている。

本稿には、浜松市の教育において多様性の包摂を目指す観点から、「不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒が、他の児童生徒に比べてどんなことに「困難さ」を感じているか」をデータ分析に基づいて明らかにすることが求められている。実は、本稿で使用するデータからは、児童生徒本人が実際に「困難さ」を「感じているか」、つまり主観的に「困っているか」まではわからないと言わざるを得ない。とはいえ、このことは本稿の分析にとって問題ではない。客観的には「困難さ」を経験しているように見える人々のほうが、その状況に慣れてしまっているために、主観的には困っていないこともある。それに対して政策立案においては、本人が主観的に困っていない場合には「困難さ」への対応は不要であるとみなす考え方が、包摂の観点からは不十分であると指摘されている。特に、教育の包摂性を検討する際には、本人の主観だけでなく、実際にどのような「困難さ」を経験しているのかを把握する視点が重要となる。そのため、本稿において「困難さ」の経験そのものを把握することには意義があると考えられる。

本稿は、一般的に良好な状況を示すと捉えられる回答が、他の児童生徒に比べて不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒で得られにくい場合に、それらの児童生徒に特有の「困難さ」が生じているものと解釈する。そしてどのような面で「困難さ」が生じているかを明らかにした上で、「上記「困難さ」を和らげるために、市や学校において必要な施策・取組とその方向性」及び「その他調査結果から見える成果と今後の課題等」について検討する。

2. データと分析方法

本稿の分析には、浜松市教育委員会が令和7年度（令和8年2月）に実施した第4次浜松市教育総合計画「実態把握調査」のうち、児童生徒を対象とした調査（以下、「児童生徒調査」とする）のデータを用いる。分析対象は、教育委員会が所管する小学校と中学校の児童生徒である。「実態把握調査」の対象には高等学校も含まれるが、回答した高校生数300人のうち、不登校生徒は0名、外国人生徒は2名、個別の支援計画を作成している生徒は0名であった。そのため、本稿の課題については高校に関する統計的分析が不可能となっている。

教育委員会から提供を受けた児童生徒調査のデータセットには、基本的に一つの児童生徒IDごとに1件のデータが保存され、小学校で5,808件、中学校で5,677件のデータが保存されている。しかし、その中には2件以上のデータが保存されている児童生徒IDが小学校で二つ（各IDについて2件のデータ）、中学校で一つ（3件のデータ）含まれていた。そこで、それらのIDについてはいちばん上の行に保存されているデータ以外を削除することにした（回答の時間的順序は不明のため、機械的な判断である）。その結果、分析の有

効サンプルに含まれる児童生徒数は小学校 5,806 人、中学校 5,675 人である。そのうち、不登校児童生徒は小学校で 55 人（1.0%）、中学校で 92 人（1.6%）、外国人児童生徒は小学校で 176 人（3.0%）、中学校で 176 人（3.1%）、個別の支援計画を作成している児童生徒は小学校で 322 人（5.6%）、148 人（2.6%）である。

児童生徒調査のすべての質問項目（以下、「項目」とする）について、当てはまる番号を選択する形で回答を得ている。そのため、分析に用いる変数はすべてカテゴリカル変数である。一つの項目を例外に（後述）すべての項目で、肯定的な回答（「当てはまる」「思う」「できている」「している」等、あるいは複数回答における選択）が行われている場合に、児童生徒の自己認識や学習と生活の状況などについて、一般的には良好と捉えられるものとみなせる。全体的に概観すると、不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒は、多くの項目でそうした肯定的な回答を行う割合が統計的に有意に低い傾向がある¹。その傾向は、とりわけ不登校児童生徒で、続いて個別の支援計画を作成している児童生徒に顕著である。

しかし、統計的に有意な差があることは、必ずしも実質的に意味のある大きな差があることを示すとは限らない。現状の課題を把握するために本稿が着目したいのは、不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の支援計画を作成している児童生徒が、それぞれ特になのような面で「困難さ」を経験しているかである。そのため、どのような項目の回答で特に大きな差が生じているか明らかにしたい。その手順として、まず、各項目について最も肯定的な回答を行った割合について、不登校児童生徒とその他の児童生徒の差、外国人児童生徒とその他の児童生徒の差、個別の支援計画を作成している児童生徒とその他の児童生徒の差を、それぞれ小学校と中学校の別に算出する。その結果、本稿が着目する各グループの児童生徒において、その他の児童生徒に比べて最も肯定的な回答の割合が 30 ポイント又は 20 ポイント少ない項目を抽出する。これらの大きな差が見られる項目で、特に「困難さ」が経験されているものと解釈する。児童生徒調査の項目に対し、全体としては肯定的な回答が多い中で、最も否定的な回答の割合よりも、最も肯定的な回答の割合においてグループ間の差が生じる項目も多いため、上述の方法で項目を取捨選択する。

例外は、「40. あなたは、ふだん（学校のある日）、1日のうち何時間程度、携帯（けいたい）電話やスマートフォン、タブレット等を使っていますか」という項目である。これについては、「3時間以上」「3時間より少なく、2時間以上」「2時間より少なく、1時間以上」「1時間より少ない」「全く使っていない」の五つの選択肢で回答を得ており、良好とは言えない「3時間以上」の回答においてグループ間で統計的に有意な差が見られることが判明している。そのため、「3時間以上」の回答の割合に着目する。

¹ すべての項目をそれぞれ被説明変数とし、不登校児童生徒か否か、外国人児童生徒か否か、個別の支援計画を作成している児童生徒か否かをそれぞれ説明変数とする二重クロス表を作成した結果、多くの場合は想定される方向で関連が見られ、カイ 2 乗検定によればその関連は 5%水準で統計的に有意であった。具体的には、不登校児童生徒か否かと個別の支援計画を作成している児童生徒か否かでは 7 割以上の項目が、外国人児童生徒か否かのクロス表では 4 割前後の項目が統計的に有意な関連を示した。

3. 分析結果

3.1. 「困難さ」の全体像

上述の手順により分析した結果、本稿が着目する各グループにおいて「困難さ」を示唆する項目を、不登校児童生徒については表1に、外国人児童生徒については表2に、個別の支援計画を作成している児童生徒については表3にそれぞれ示す。三つの表を見比べると、「困難さ」を示唆する項目の数が最も多いのは、小学校と中学校ともに不登校児童生徒である。表2と表3からは、外国人児童生徒と個別の支援計画を作成している児童生徒では、学校を楽しいと思う場面や放課後や週末の活動の一部で「困難さ」が生じていることが示されるのに対し、表1からは不登校児童生徒の「困難さ」が多岐にわたる領域で生じていることが示される。紙幅の都合により具体的な項目を挙げることは省略するため、表1から表3を参照してほしい。

表1から表3を通じ、本稿が着目するすべてのグループで（少なくとも小学校と中学校のどちらかで）、体験学習と行事に「困難さ」が生じている可能性が示唆される。表4に示すとおり、全体では過半数の児童生徒が学校を楽しいと思う場面として体験学習と行事を挙げている。教職員にとっても、大部分の児童生徒が体験学習と行事に楽しみや充実感を感じているように見え、それらを通じた児童生徒の成長を喜ばしく思うことが多いと考えられる。学校教育を全体として捉える限りにおいては、その評価が概ね適切であることがデータによっても裏付けられる。しかし、学校を楽しいと思う場面として体験学習と行事を挙げる児童生徒の割合が、本稿が着目するグループでは、中学校の外国人児童生徒を除き、半分に以下に留まる。このことは、学校教育の包摂性の観点で課題となる。

3.2 不登校児童生徒における「困難さ」

表5は、表1で（少なくとも小学校と中学校のどちらかで）示された不登校児童生徒における様々な「困難さ」の一部について、小学校と中学校の別に回答の分布を示したものである。まず、「自分には、よいところがあると思いますか」という項目は自尊感情を表し、それをもつことは児童生徒の誰にとっても基本的に重要なことである。にもかかわらず、不登校児童生徒は他の児童生徒に比べて「当てはまる」と回答する割合が低い。「どちらかといえば、当てはまる」を合わせれば、小学校では80%、中学校では61%の不登校児童生徒が自尊感情をある程度はもっていると言えるが、その他の児童生徒に比べれば自尊感情を高く保つ上で「困難さ」が生じている。「当てはまる」と回答する割合に着目した際には、中学校では不登校児童生徒とその他の児童生徒の差が小学校に比べて小さかったが、「当てはまらない」と回答する割合で見れば、中学校のほうが不登校児童生徒の自尊感情にはより大きな「困難さ」が生じている。

表1 不登校児童生徒において「困難さ」を示す項目

小学校	
30ポイント以上差がある項目	
6_5. 体験学習（宿泊を伴う活動を含む） [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
32. 毎日、同じくらいの時刻（じこく）に起きていますか	
38. ICT機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができますか	
40. あなたは、ふだん（学校のある日）、1日のうち何時間程度、携帯（けいたい）電話やスマートフォン、タブレット等を使っていますか	
51. 学校や学校以外で身の回りに危険（きけん）なことがあった時、どのようにひなんしたり、身を守ったりしたらよいか知っていますか	
20ポイント以上差がある項目	
2. 自分には、よいところがあると思いますか	
6_2. 友達と話し合いながら進める学習 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_6. タブレットパソコンを使った学習 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
10. 分からないことやわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか	
15. 家庭では、自分で決めた時間に勉強していますか	
16. 授業では、自分で決めたことを最後までねばり強くやりとげようとしていますか	
17. 授業では、「知りたい」「分かってほしい」「できるようになりたい」と思って学習に取り組んでいますか	
18. 授業では、見通しをもって活動したり、ふり返ったことを次に生かしたりしていますか	
19. 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか	
28. 体育の授業以外で、平均して1日に1時間以上、運動（体を動かす遊び、登下校の時間をふくむ）やスポーツをしていますか	
30. 食事のときは、マナーを守り、自分に合った量を栄養のバランスよく食べることを意識していますか	
37. 5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか	
42. 学級をより良くするために何かしてみたいと思いますか	
43. 学校をより良くするために何かしてみたいと思いますか	
44. キャリア・パスポートを活用して、自分の内面の成長をふり返ることができていますか	
47. 自分が学びたいことやできるようになりたいことに挑戦（ちょうせん）する機会・場所がありますか	
50. 自分たちの安全を守ってくれている人や場所があることを知っていますか	
55_5. 習い事（スポーツに関する習い事を除く）をしている [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	
55_6. スポーツ（スポーツに関する習い事を含む）をしている [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	

「学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」及び「ICT機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができますか」という質問は、どちらも児童生徒の対話や協働を通じた学びの状況について尋ねている。表1では「確かな学力の育成」に関する多くの項目において不登校児童生徒の「困難さ」が明らかとなったが、対話や協働を通じた学びについても不登校児童生徒は「困難さ」を経験している。

表1 不登校児童生徒において「困難さ」を示す項目（続き）

中学校	
30ポイント以上差がある項目	
6_5. 体験学習（宿泊を伴う活動を含む） [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_9. 行事 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_11. 部活 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
28. 体育の授業以外で、平均して1日に1時間以上、運動（体を動かす遊び、登下校の時間をふくむ）やスポーツをしていますか	
40. あなたは、ふだん（学校のある日）、1日のうち何時間程度、携帯（けいたい）電話やスマートフォン、タブレット等を使っていますか	
20ポイント以上差がある項目	
6_2. 友達と話し合いながら進める学習 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_8. 休み時間 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_10. 給食 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
17. 授業では、「知りたい」「分かりたい」「できるようになりたい」と思って学習に取り組んでいますか	
19. 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか	
27. 体を動かすことが好きですか	
30. 食事のときは、マナーを守り、自分に合った量を栄養のバランスよく食べることを意識していますか	
32. 毎日、同じくらいの時刻（じこく）に起きていますか	
38. ICT機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができていますか	
42. 学級をより良くするために何かしてみたいと思いますか	
46. こまりごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	
50. 自分たちの安全を守ってくれている人や場所があることを知っていますか	
53. 家の人や地域（ちいき）の方から学ぶことは、自分のためになるとして学習に取り組んでいますか	
55_4. 学習塾など学校や家以外の場所で勉強している [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	
55_6. スポーツ（スポーツに関する習い事を含む）をしている [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	

表2 外国人児童生徒において「困難さ」を示す項目

小学校	
20ポイント以上差がある項目	
6_5. 体験学習（宿泊を伴う活動を含む） [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_9. 行事 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
中学校	
30ポイント以上差がある項目	
55_9. 学校の部活動に参加している [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	

特に中学校の不登校生徒では、対話を通じて学ぶような活動を行っていない割合も21%と高い。

不登校児童生徒の生活において、運動やスポーツをする時間の確保に「困難さ」が生じているとともに、携帯電話やスマートフォン、タブレット等の使用時間の制限に「困難さ」が生じている。それぞれ「健やかな心身の育成」や「情報活用能力の育成」の観点での課題だと言える。また、不登校児童生徒の「困難さ」としてあまり注目されてこなかったかもしれないが、「学校安全の推進」により児童生徒が通常習得する、危険から身を守るための知識を得る機会が、不登校児童生徒には不足している可能性も示された。

表 3 個別の支援計画を作成している児童生徒において「困難さ」を示す項目

小学校	
20ポイント以上差がある項目	
6_2. 友達と話し合いながら進める学習 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_5. 体験学習（宿泊を伴う活動を含む） [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_9. 行事 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
中学校	
30ポイント以上差がある項目	
6_5. 体験学習（宿泊を伴う活動を含む） [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_9. 行事 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
55_9. 学校の部活動に参加している [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	
20ポイント以上差がある項目	
6_2. 友達と話し合いながら進める学習 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
6_8. 休み時間 [6. どのようなときに、学校は楽しいと思いますか]	
55_4. 友達と遊んでいる [55. あなたは放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか]	

表 4 学校を楽しいと思う場面として、体験学習又は行事を選択する割合

	小学校		中学校	
		n(人)		n(人)
体験学習				
全体	73%	5806	69%	5675
不登校児童生徒	42%	55	35%	92
外国人児童生徒	47%	176	50%	176
個別の支援計画を作成している児童生徒	50%	322	39%	148
行事				
全体	58%	5806	72%	5675
不登校児童生徒	40%	55	40%	92
外国人児童生徒	34%	176	59%	176
個別の支援計画を作成している児童生徒	33%	322	43%	148

4. 今後の施策・取組に向けて

不登校児童生徒、外国人児童生徒及び個別の教育支援計画を作成している児童生徒に着目すると、学校教育において全体としては成果を上げている取組であっても、一部の児童生徒にとっては「困難さ」につながっている可能性が示唆された。この点で学校教育の包摂性を高めるためには、当事者の声を聞くことの重要性を改めて強調する必要があるだろう。本稿では、3つのグループに共通して体験学習と行事における「困難さ」が生じていることが示されたが、不登校児童生徒、外国人児童生徒、個別の教育支援計画を作成している児童生徒がそれぞれ経験している「困難さ」の性質は異なる可能性もある。それぞれの「困難さ」を具体的に理解しなければ、包摂性の向上には限界があり、また具体的に理解するには、当事者に話を聞いてみるのが不可避だと考えられる。

学校教育の包摂性を高める上で、とりわけ不登校児童生徒が最も多くの「困難さ」を抱えていることが明らかになった。もっとも、学校生活上の「困難さ」の蓄積が不登校につながっている側面も否定できないため、こうした分析結果に驚きはないかもしれない。しかし、本稿の分析の意義は、不登校児童生徒が抱える「困難さ」を、個々の児童生徒の属性や適応上の問題に還元して理解する見方に再考を促す点にある。各学級・各学校では、不登校はしばしば個別的な課題として把握されてきたかもしれない。しかし、本稿の分析表5 不登校児童生徒において「困難さ」が生じている項目の一部についての回答分布結果からは、多くの不登校児童生徒に共通して見られる「困難さ」の背景に、学校教育の包摂性の低さが存在している可能性が示唆される。

	小学校					中学校				
	2. 自分には、よいところがあると思いますか									
	どちらかとい 当てはまる	どちらかとい え、当ては まる	どちらかとい え、当ては まらない	当てはまら ない		どちらかとい 当てはまる	どちらかとい え、当ては まる	どちらかとい え、当ては まらない	当てはまら ない	
不登校児童生徒	18%	62%	16%	4%		28%	33%	28%	11%	
その他の児童生徒	46%	43%	8%	3%		41%	45%	10%	3%	
	19. 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか									
	どちらかとい 当てはまる	どちらかとい え、当ては まる	どちらかとい え、当ては まらない	当てはまら ない	学級の友達と の間で話し合 う活動を行っ ていない	どちらかとい 当てはまる	どちらかとい え、当ては まる	どちらかとい え、当ては まらない	当てはまら ない	学級の生徒と の間で話し合 う活動を行っ ていない
不登校児童生徒	31%	43%	17%	4%	6%	22%	36%	11%	10%	21%
その他の児童生徒	51%	38%	8%	2%	1%	44%	46%	8%	2%	1%
	38. ICT機器を活用することで、友達と協力しながら学習を進めることができていると思いますか									
	思う	どちらかとい え、思う	どちらかとい え、思わな い	思わない		思う	どちらかとい え、思う	どちらかとい え、思わな い	思わない	
不登校児童生徒	23%	42%	25%	11%		20%	47%	16%	17%	
その他の児童生徒	54%	36%	7%	2%		47%	42%	9%	3%	
	28. 体育の授業以外で、平均して1日に1時間以上、運動（体を動かす遊び、登下校の時間をふくむ）やスポーツをしていますか									
	している （1時間以 上）	どちらかとい え、してい る（30分～1 時間）	どちらかとい え、してい ない（30分未 満）	全くして いない		している （1時間以 上）	どちらかとい え、してい る（30分～1 時間）	どちらかとい え、してい ない（30分未 満）	全くして いない	
不登校児童生徒	26%	28%	30%	15%		25%	33%	26%	16%	
その他の児童生徒	50%	29%	17%	4%		61%	20%	13%	6%	
	40. あなたは、普段（学校のある日）、1日のうち何時間程度、携帯電話やスマートフォン、タブレット等を使っていますか									
	3時間以上	3時間より 少なく、 2時間以上	2時間より 少なく、 1時間以上	1時間より 少ない	全く使って いない	3時間以上	3時間より 少なく、 2時間以上	2時間より 少なく、 1時間以上	1時間より 少ない	全く使って いない
不登校児童生徒	57%	15%	11%	11%	6%	71%	18%	10%	1%	0%
その他の児童生徒	27%	21%	26%	20%	6%	40%	29%	22%	8%	1%
	51. 学校や学校以外で身の回りに危険（きけん）なことが起こった時、どのようにひなんしたり、身を守ったりしたらよいか知っていますか									
	知っている	どちらかとい え、知って いる	どちらかとい え、知らな い	知らない		知っている	どちらかとい え、知って いる	どちらかとい え、知らな い	知らない	
不登校児童生徒	38%	44%	13%	5%		37%	51%	10%	2%	
その他の児童生徒	69%	26%	3%	1%		53%	39%	6%	2%	

注：サンプルサイズは小学校の不登校児童生徒が55（人）、その他の児童生徒が5751（人）、中学校の不登校児童生徒が92（人）、その他の児童生徒が5583（人）。

不登校児童生徒には、家庭内で過ごす時間の比重が高いこととも関連すると考えられる、心身の育成や学力向上に適した生活・学習を継続する上での「困難さ」が見られた。このことを踏まえると、直ちに学校復帰を求めることが難しい場合には、学校外における多様な教育機会を保障することの重要性は大きい。

しかし同時に、本稿の分析からは、不登校児童生徒が対話や協働を通じて学ぶ上でも「困難さ」を経験していることが示された。対話や協働を通じた学びの機会を学校以外で十分に保障することは、必ずしも容易ではないと考えられる。その意味で、不登校児童生徒にとって、学校教育の包摂性が高まり、学校がより通いやすく参加しやすい場へと変化していくことの意義は大きい。

（卯月 由佳）

浜松市における児童生徒と教員の主観的 well-being

1. 目的と研究課題

本稿の目的は、浜松市における児童生徒と教員のウェルビーイングの内部構造と関連構造を調査データから計量的に把握し、ウェルビーイング政策に対する示唆を提示することにある。児童生徒と教員の主観的 well-being の構造を整理した上で、以下の5点の研究課題の解明を試みる。すなわち、①不登校は主観的 well-being と関係しているのか。②不登校選択の影響は児童生徒間で均一か。③児童生徒が所属する学校・学級は、主観的 well-being と関係しているのか。④児童生徒と教員の主観的 well-being は教職キャリアの影響を受けるのか。⑤児童生徒と教員の主観的 well-being は相関関係にあるのか。

2. 児童生徒と教員の主観的幸福感の構造

2.1 児童生徒の主観的 well-being の構造

今回調査(小中学生データに限定)では、児童生徒の主観的 well-being を、Hedonic と Eudaimonic の視点から整理する(Ryan & Deci, 2001)。Hedonic 視点では、幸福をポジティブ感情の増大、ネガティブ感情の減少としてとらえる。学校生活における享楽性(楽しさ、心地よさ)の優勢度と理解する。一方、Eudaimonic 視点では、潜在能力の充実・実現としてとらえる。学校生活における人間的成長や充実、意義深い目標追求の程度と理解する。Hedonic 視点に立ち、学校における楽しさを実感する場面として11項目を選択した。「q6 どのようなときに、学校は楽しいと思いますか」との設問に対する複数回答(選択=1, 非選択=0)を求め、カテゴリカル主成分分析を実施した。その結果、個人-集団のX軸となる「協調」次元、非快楽-快楽のY軸となる「享楽」次元が析出された(図1)。

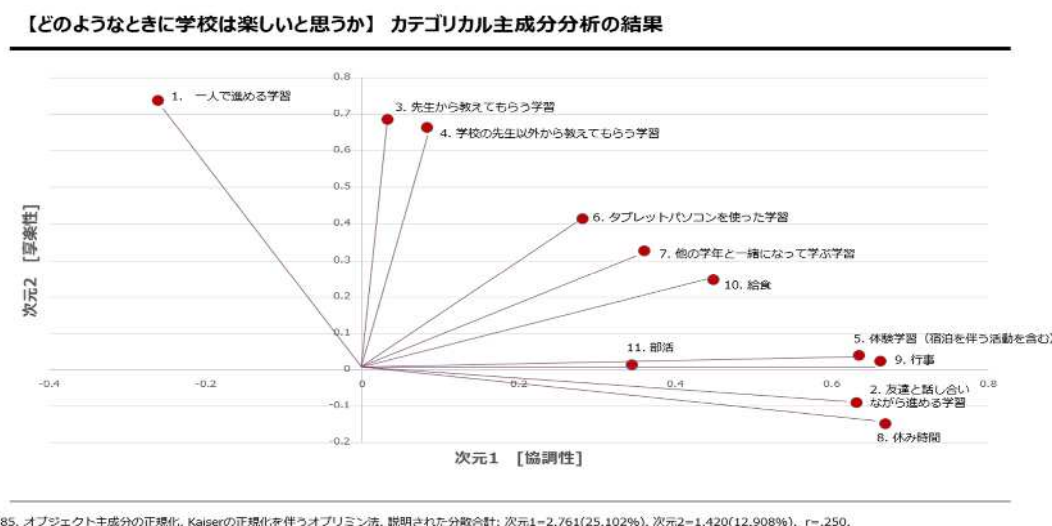


図1 児童生徒の Hedonic の2次元構造

また、Eudaimonic 視点では、主に授業・学習場面での積極的活動の状況を示す認知次元(10-18 の 9 項目のカテゴリカル主成分分析; 成分負荷 0.568-0.775, $\alpha=0.872$)、忍耐・自己抑制・目標達成・再起等の社会情動的スキルの獲得状況を示す情動次元(1-5, 21, 48 の 7 項目のカテゴリカル主成分分析; 成分負荷 0.483-0.718, $\alpha=0.772$)、運動・食・睡眠習慣等の獲得状況を示す健康次元(27-32 の 6 項目のカテゴリカル主成分分析; 成分負荷 0.447-0.787, $\alpha=0.701$)をそれぞれ設定した。5 変数の平均値・標準偏差、相関マトリクスを

表 1 に示す。

表 1 児童生徒の主観的 well-being: 記述統計量と相関マトリクス

		M	SD	協調	享楽	認知	情動	健康
Hedonic	協調スコア	0.000	1.000	—				
	享楽スコア	0.000	1.000	.250***	—			
Eudaimonic	認知スコア	0.000	1.000	.187***	.271***	—		
	情動スコア	0.000	1.000	.256***	.205***	.636***	—	
	健康スコア	0.000	1.000	.255***	.094***	.408***	.499***	—

Note. N=11,485. *** $p<.001$.

2.2 教員の主観的 well-being の構造

教員の主観的 well-being については、代理指標としてワーク・エンゲイジメントと教師効力感を使用する。ワーク・エンゲイジメントの測定においては、Schaufeli & Bakker (2003) のユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度を参考に、浜松市の文脈を考慮した上で 3 項目版を作成した。「没頭」が「誇りとやりがい」に修正されている。主成分分析(オブリミン回転)の結果、1 成分が抽出された(成分負荷 0.746-0.905, $\alpha=.794$)。教師効力感の測定においては、浜松市の教師が担う職務の遂行状況について、21 項目を作成した。主成分分析(オブリミン回転)の結果、3 成分が抽出された。第 1 成分は、学習指導場面での指導・支援・工夫に関する 10 項目(1, 2, 6, 7, 8, 9, 10, 16, 23, 27)であり「学習指導効力感(成分負荷 0.746-0.905, $\alpha=.868$)」と命名する。第 2 成分は、地域社会とのかかわりや探究的な学習の実施に関する 5 項目(13, 14, 19, 20, 26)であり「地域探究効力感(成分負荷 0.330-0.724, $\alpha=.792$)」と命名する。第 3 成分は、情報モラル・いじめ・安全等の生活指導上の指導に関する 6 項目(11, 12, 17, 18, 48, 51)であり「生活指導効力感(成分負荷 0.513-0.726, $\alpha=.776$)」と命名する。これら 4 変数のいずれも標準化スコアを使用する。4 変数の平均値・標準偏差、相関マトリクスを表 2 に示す。

表 2 教員の主観的 Well-being: 記述統計量と相関マトリクス

	M	SD	WE	学習	地域	生活
ワーク・エンゲイジメント	0.000	1.000	—			
学習指導効力感	0.000	1.000	.383***	—		
地域探究効力感	0.000	1.000	.170***	.384***	—	
生活指導効力感	0.000	1.000	.330***	.518***	.247***	—

Note. N=1710. *** $p<.001$.

3. 不登校と主観的 well-being の関係 (RQ1)

不登校選択は、児童生徒の主観的 well-being と関係しているのだろうか。不登校児童生徒 (n=147) とその他 (n=11, 338) のスコアを比較した結果を図 2 に示す (等分散性を仮定しない t 検定)。協調スコア (0.960SD)、認知スコア (0.965SD)、健康スコア (0.884SD)、情動スコア (0.670SD)、享楽スコア (0.236SD) であり、複数の変数で 1SD に迫る重大なインパクトが確認されている。また、全変数の Cohen(d) 効果量は「大(>0.8)」の水準に到達している。本データでは、不登校と主観的 well-being の因果関係は十分説明できない。しかし、不登校が原因・結果のいずれであっても、不登校選択の児童生徒が、身体的・精神的・社会的に良い状態にあるとは考えられない。

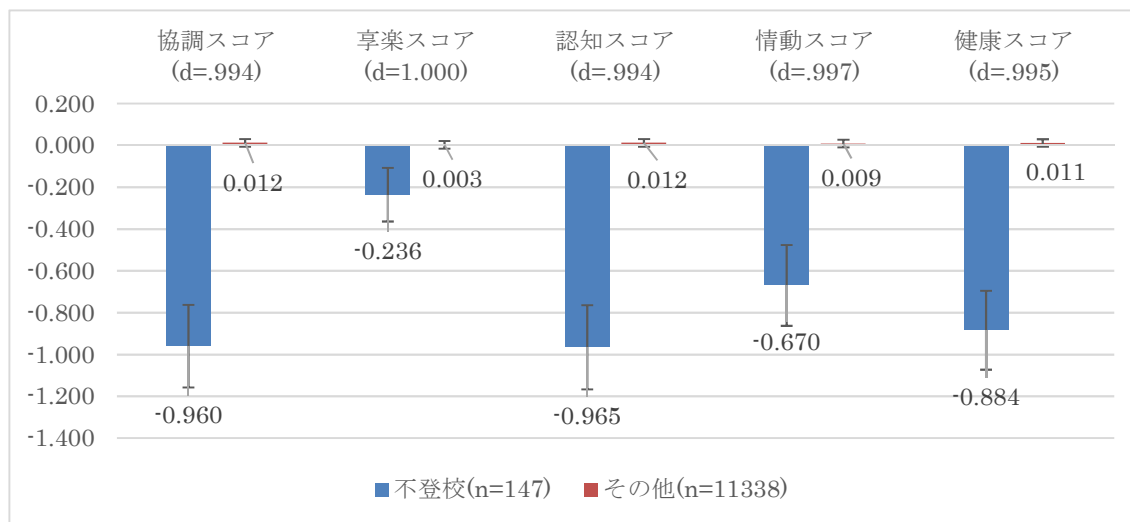


図 2 不登校と主観的 Well-being の関係

4. 不登校選択の影響は児童生徒間で均一か (RQ2)

不登校選択の負の影響は、どの児童生徒も均一なのだろうか。統制変数を設定した分位点回帰分析によってこの研究課題の解明に迫る。

統制変数としては、外国ツール、個別支援計画、小学校ダミー、家庭関係 (56)、教師関係 (46)、地域関係 (50)、オンライン関係 (小学校 36・中学校 40)、放課後・週末の過ごし方 (55 の 9 項目) の 16 変数を設定した。

分位点回帰分析では、q10、q25、q50、q75、q90 の 5 つのパーセンタイルを設定した。分位点回帰分析を用いる理由は以下の 3 点である。第 1 は、正規分布の仮定を要しない点である。本研究で使用する主観的 well-being の各スコアは正規分布ではなく、左右に歪んだ分布となっている。第 2 は、分布の全体像を把握できる点である。最小二乗法回帰分析が条件付き平均のみを推定するのに対し、分位点回帰は条件付き分布のさまざまな分位点を個別に推定することができる。これにより、説明変数の効果が分布の下位・中位・上位で異なるかどうかを検証できる。第 3 は、外れ値の影響を受けにくい点である。最小二乗法推定量は外れ値に対して敏感であり、少数の極端な値が回帰係数を大きく歪める可能性がある。分位点回帰、特に中央値回帰は、残差の絶対値の加重和を最小化するため外れ値が推定結果に与える影響を大幅に抑制できる。

主観的 well-being に対する不登校の影響を検証する 16 の統制変数を含めた分位点回帰モデルを構築した。分析結果を表 3 に示す。統制変数の推定結果は省略している。

主観的 well-being の協調スコアについては、q50、q25、q10 において、不登校選択の負の影響が顕著である。不登校選択は、協調スコア (体験学習、行事、協働・対話学習、休み

時間等)が低位の児童生徒において、協調スコアをさらに低下させる。また、認知スコアについては、q10、q25、q50、q75において、不登校選択の影響が顕著である。不登校選択は、授業・学習場面での積極的活動状況が低位の児童生徒において、こうした状況をさらに悪化させる。また、情動スコアについても、q10、q25、q50、q75において、不登校選択の影響が顕著である。忍耐・自己抑制・目標達成・再起等の社会情動的スキルの獲得状況が特に低位の児童生徒において、こうした状況をさらに悪化させる。最後に、健康スコアにおいては、q10、q25、q75、q50、q90において、不登校選択の影響が顕著である。運動・食・睡眠習慣等の獲得状況は、どの分布帯においても、こうした状況に負の影響を持つ。

以上の分析結果から、不登校選択は、協調スコア、認知スコア、情動スコアが低位の児童生徒にとって、ダメージが大きいことがわかる。これらのスコアが高位の児童生徒にとってのダメージは相対的に小さい。一方、健康スコアについては、いずれの分布帯においても、不登校選択の負の影響が確認されている。

表 3 分位点回帰分析の結果

	q10		q25		q50		q75		q90	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
協調スコア										
不登校	-0.568***	0.164	-0.683***	0.127	-0.738***	0.097	-0.375***	0.076	-0.258***	0.069
統制変数	✓		✓		✓		✓		✓	
疑似 R2	0.152		0.152		0.121		0.085		0.059	
享楽スコア										
不登校	0.007	0.038	0.085	0.056	0.076	0.088	0.019	0.150	-0.085	0.193
統制変数	✓		✓		✓		✓		✓	
疑似 R2	0.033		0.042		0.087		0.105		0.129	
認知スコア										
不登校	-0.736***	0.152	-0.545***	0.101	-0.479***	0.087	-0.315***	0.090	-0.146	0.086
統制変数	✓		✓		✓		✓		✓	
疑似 R2	.189		.187		.182		.176		.150	
情動スコア										
不登校	-0.365*	0.146	-0.322**	0.102	-0.286**	0.090	-0.176*	0.088	-0.016	0.078
統制変数	✓		✓		✓		✓		✓	
疑似 R2	0.199		0.187		0.178		0.156		0.121	
健康スコア										
不登校	-0.549***	0.157	-0.535***	0.111	-0.354***	0.088	-0.477***	0.074	-0.321***	0.063
統制変数	✓		✓		✓		✓		✓	
疑似 R2	0.195		0.212		0.191		0.132		0.075	

Note. N=11485. *** p < .001, ** p < .01, * p < .05. B は非標準化偏回帰係数, SE は標準誤差.

5. 児童生徒が所属する学校・学級は主観的 well-being と関係しているのか (RQ3)

児童生徒の主観的 well-being は、所属する学校や学級の影響を受けるのだろうか。級内相関係数 (ICC: intraclass correlation coefficients) を検討することで、学校や学級の分散説明量を確認する。教諭等で学級担任をもつ教師の学級に所属する児童生徒 (N=10, 805) を対象として ICC を算出した。学校の分散説明量 (学校間分散 / (学校内分散 + 学校間分散)) は、協調スコア (2. 9%)、享楽スコア (5. 1%)、認知スコア (4. 3%)、情緒スコア (3. 3%)、健康スコア (0. 8%) であった。一方、学級の分散説明量 (学級間分散 / (学級内分散 + 学級間分散)) は、協調スコア (3. 4%)、享楽スコア (5. 7%)、認知スコア (5. 3%)、情緒スコア (3. 5%)、健康スコア (0. 4%) であった。児童生徒の主観的 well-being の享楽次元と認知次元は、どの学校・学級に所属するかで 5 % 程度が説明されており、これは十分な説明量である。一方、健康次元は、学校・学級の説明量が相対的に小さく、家庭の影響によるところが大きいと推察される。

6. 児童生徒と教員の主観的 well-being は教職キャリアの影響を受けるのか(RQ4)

児童生徒の主観的 well-being は、担任する教員のキャリアの影響を受けるのか。教諭等で学級担任をもつ教師の学級に所属する児童生徒(N=10,805)を対象として、6段階のキャリアステージごとの平均値を確認した。一元配置分散分析の結果、協調スコア($F=2.894$, $p<.05$, $\eta^2=.001$)、享楽スコア($F=4.959$, $p<.001$, $\eta^2=.002$)、認知スコア($F=3.533$, $p<.01$, $\eta^2=.002$)、情緒スコア($F=3.320$, $p<.01$, $\eta^2=.002$)、健康スコア($F=1.745$, $p=n.s.$, $\eta^2=.001$)であり、健康スコア以外の4変数は、教職キャリアの影響を受けている。ただし、効果量 η^2 はいずれも「小($<.01$)」である。全体的にみると、教職経験年数21-30年目のベテランの学級に所属する児童生徒の主観的 well-being がもっとも高い。ただし、31年目以上では、享楽スコア以外の変数が下降傾向にあり、児童生徒の well-being と教職経験の関係は線型関係ではないことが示されている。一方、期教職経験年数10年以下の若年層教員の学級に所属する児童生徒は、相対的にスコアが低い。初任者は全次元においてマイナス水準にある。

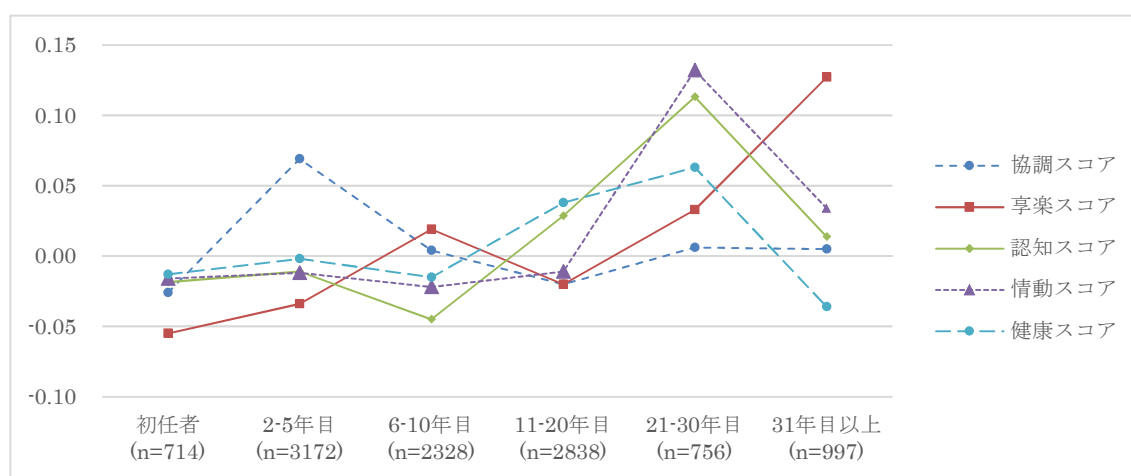


図3 教職経験年数と児童生徒の主観的 well-being の関係

教員の主観的 well-being は、本人のキャリアの影響を受けるのか。教諭等で学級担任をもつ教師(N=1,710)を対象として、6段階のキャリアステージごとの平均値を確認した。一元配置分散分析の結果、ワーク・エンゲイジメント($F=4.085$, $p<.01$, $\eta^2=.012$)、学習指導効力感($F=2.935$, $p<.05$, $\eta^2=.009$)、地域探究効力感($F=3.453$, $p<.01$, $\eta^2=.010$)、生活指導効力感($F=8.275$, $p<.001$, $\eta^2=.024$)、4変数いずれも、教職キャリアの影響を受けている。効果量はいずれも「小」に相当する。全体的にみると、教職経験年数21-30年目のベテラン教員の主観的 well-being がもっとも高い。ただし、31年目以上では、生活指導効力感以外の変数が下降傾向にあり、教員の主観的 well-being と教職経験の関係は線型関係ではないことが示されている。一方、教職経験年数10年以下の若年層教員は、相対的にスコアが低い。特に初任者教員は、学習指導効力感と生活指導効力感において大幅なマイナス水準にある。

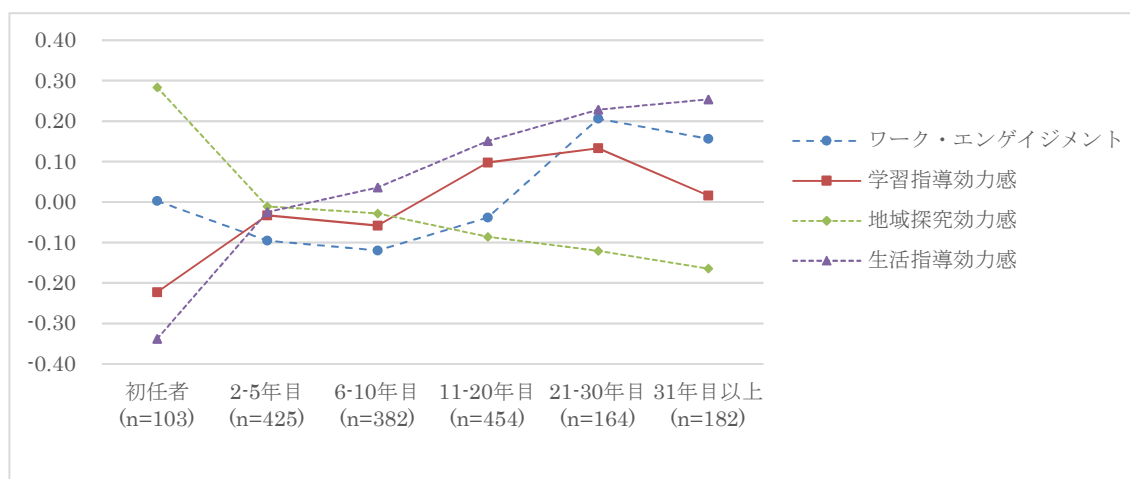


図 4 教職経験年数と教員の主観的 well-being の関係

7. 児童生徒と教員の主観的 well-being の相関関係 (RQ5)

児童生徒と教員の主観的 well-being には有意な相関性があるのか。児童生徒と学級担任教員のマッチングが成立した 370 学級を対象として相関分析を実施した。分析の結果、教員の教師効力感が、児童生徒の Eudaimonic との間に正の相関を有していた。特に、学習指導効力感は、Eudaimonic の 3 変数と有意な正の相関を有していた。特に、教員が学習指導場面での指導・支援・工夫に自信をもって取り組んでいるとき、児童生徒の成長・実現面での well-being も高くなる関係が認められている。この結果は、Maricuțoiu et al. (2023) のメタ分析の結果と一致している。

表 3 児童生徒と教員の主観的 well-being 相関

児童生徒 教員	Hedonic			Eudaimonic	
	協調スコア	享楽スコア	認知スコア	情動スコア	健康スコア
ワーク・エンゲイジメント	-.102	-.110	-.051	.011	.057
学習指導効力感	-.104	-.004	.241**	.255**	.187**
地域探究効力感	-.073	-.030	.089	.153*	.157*
生活指導効力感	-.141	-.006	.114	.151*	.156*

Note. N=370. ** p < .01, * p < .05.

実践的示唆

研究課題の解明を通して得られた知見と示唆は以下の通りである。

第 1 に、不登校は児童生徒の主観的 well-being を棄損する可能性がある。主観的 well-being が比較的高い児童生徒の不登校選択は、負の影響が小さい。しかし、主観的 well-being が低位の児童生徒による不登校選択は、主観的 well-being を大幅に悪化させる。保護者調査では、保護者が学校を信頼するときの第 1 位が「子どもが生き生きとして学校に通っているとき(選択率は小学校 60.6%、中学校 68.7%)」であった。不登校選択の放置は、地域の児童生徒の幸福格差を招くだけでなく、保護者による学校信頼を棄損する可能性を持つ大問題である。不登校支援では、①欠席を児童生徒の不調警告(アラート)ととらえ、また、社会正義問題(保護者の SES が介在)としてとらえること。②登校の重要性と不登校選択のキャリアリスクについての関係者間の理解を促進すること。③児童生徒・保護者との対話、学習機会の断絶を阻止すること。④欠席日数 30 日以上の統計基準にとらわれることなく、5 日・10 日・20 日等のショートのスパンでのデータ収集とチーム対策のパツ

ケースを考案すること。⑤校内サポートルームをはじめとして、学校内に複数の拠点を設置し、校舎全体の立体空間を活用した設計・運用に努めること（小学校での実施が効果的）。

第2に、児童生徒の主観的 well-being は、教員の教職キャリアや自己効力感と関係していた。Hedonic(楽しさ)と Eudaimonic(成長・実現)共に、若年層教員の苦戦ぶりが示された。教員の職能開発による自己効力感が、児童生徒の Eudaimonic 系の主観的 well-being と関連していた。授業実践の質が児童生徒の主観的 well-being に結び付きやすいため、well-being 向上の文脈においても、学力向上と同様に、授業力を高めることの価値が示唆される。授業力に欠ける教員が、楽しさ重視の学級経営を実践としたとしても、児童生徒の主観的 well-being は改善されないであろう。若年層教員の授業力にフォーカスした校内研修(ミニ研修)の活性化が期待される。

参考文献

- Maricuțoiu, L. P., Pap, Z., Ștefancu, E., Mladenovici, V., Valache, D. G., Popescu, B. D., Ilie, M., & Vîrgă, D. (2023). Is teachers' well-being associated with students' school experience? A meta-analysis of cross-sectional evidence. *Educational Psychology Review*, 35(1), 1-36.
<https://doi.org/10.1007/s10648-023-09721-9>
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2001). On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. *Annual Review of Psychology*, 52, 141-166.
<https://doi.org/10.1146/annurev.psych.52.1.141>
- Schaufeli, W. B., Salanova, M., González-romá, V., & Bakker, A. B. (2002). The measurement of engagement and burnout: A two sample confirmatory factor analytic approach. *Journal of Happiness Studies*, 3(1), 71-92.
<https://doi.org/10.1023/A:1015630930326>

(露口 健司)



第4章 有識者の意見

静岡大学教育学部 准教授 島田 桂吾 氏

参考 第4次浜松市教育総合計画推進会議・推進部会

第4次浜松市教育総合計画に掲げる教育理念や目指すこどもの姿の実現に向けて、施策・取組の確実な推進を図ることを目的に、以下の推進会議・推進部会を設置して重点施策等に係る協議を行いました。

1 第4次浜松市教育総合計画推進会議

■推進会議委員

	氏 名	職 名
教育委員会	野秋 愛美	教育長（委員長）
	田中 佐和子	教育長職務代理者（副委員長）
	神谷 紀彦	教育委員
	鈴木 重治	教育委員
	下鶴 志美	教育委員
	高木 邦子	教育委員
学識経験者	卯月 由佳	国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 副部長
	山下 絢	日本女子大学 人間社会学部 教授
	島田 桂吾	静岡大学 教育学部 准教授
学校代表	石野 政史	浜松市立気賀小学校 校長
	野中 崇	浜松市立南部中学校 校長

■開催状況

	開催日	協議内容
第1回	令和7年7月30日 （書面開催）	今年度の方向性について （1）教育DX推進部会 （2）学校における働き方改革推進部会 （3）評価・検証推進部会
第2回	令和8年2月9日	（1）教育DX推進部会 ・浜松市版 教育DX推進の全体像（案）について （2）学校における働き方改革推進部会 ・浜松市教職員に関する業務量管理・健康確保措置 実施計画（案）について

2 推進部会

(1) 評価・検証

■有識者

氏 名	職 名
露口 健司	愛媛大学大学院教育学研究科 教授
山下 絢	日本女子大学人間社会学部 教授

■開催状況

	開催日	協議内容
第1回	令和7年6月25日	第4次浜松市教育総合計画の評価・検証について
第2回	令和7年10月28日	(1) 調査項目について (2) データの利活用について ・評価・検証の視点について ・学校への結果提供について

(2) 教育DX

■有識者

氏 名	職 名
三井 一希	山梨大学教育学部 准教授
塩田 真吾	静岡大学教育学部 准教授

■開催状況

	開催日	協議内容
第1回	令和7年7月16日	(1) 第4次浜松市教育総合計画を支える教育DXの在り方について ・教育DXについて ・教育DXに関する教育センターの取組内容 ・教育DX推進部会の方向性について (2) 学校現場における生成AI利活用について ・生成AIの利活用について ・AIを活用した英語教育モデル校 ・生成AI利活用の全体像
第2回	令和7年12月16日	本市における教育DX推進の全体像(案)について

(3) 学校における働き方改革

■有識者

氏 名	職 名
紅林 伸幸	常葉大学大学院学校教育研究科 教授
高木 邦子	静岡文化芸術大学文化政策学部 教授

■開催状況

開催日		協議内容
第1回	令和7年9月16日	(1)「業務改善方針」におけるこれまでの取組状況と成果について (2)「業務管理・健康確保実施計画」の策定に向けて ・国の動向について ・教員の負担感・働きがいに関する意識調査結果について
第2回	令和8年1月23日	浜松市教職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画 骨子(案)について

「第4次浜松市教育総合計画」
令和7年度 実施報告書
令和8年 月

編集・発行 浜松市教育委員会教育総務課
浜松市中央区中央一丁目2番1号
イーステージ浜松オフィス棟6階
TEL 053-457-2401
E-mail k-kikaku@city.hamamatsu-szo.ed.jp